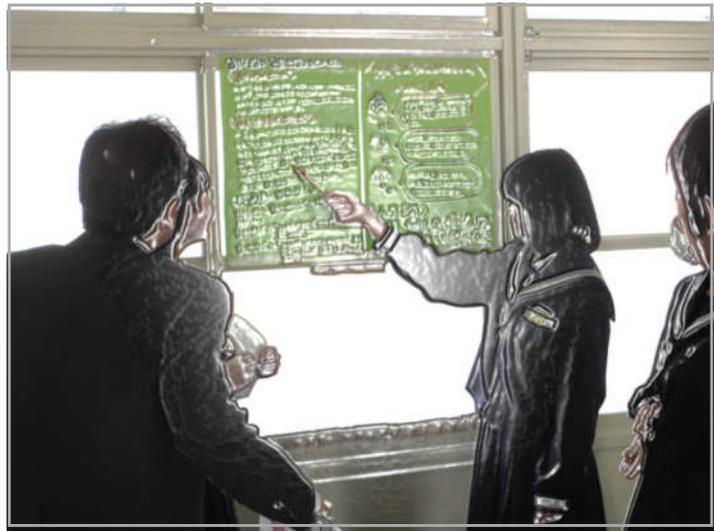


鹿児島県総合教育センター
平成24年度長期研修報告書

研究主題

古典を主体的に読むための国語科学習指導の在り方
－比べ読みの活動と伝え合う活動を通して－



出水市立出水中学校
教諭 穂田 美奈子

目次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	1
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	研究主題に関する基本的な考え方	
(1)	「古典を主体的に読む」とは	2
(2)	「伝統的な言語文化」における身に付けさせたい力	3
(3)	比べ読みの活動と伝え合う活動とは	6
2	生徒の意識調査の分析と考察	
(1)	古典の学習に関する意識調査の分析と考察	7
(2)	調査結果から設定した研究の視点	8
3	生徒が主体的に古典を読むための国語科授業の構想	
(1)	基礎的・基本的な知識・技能の定着のための工夫	8
(2)	比べ読みのための工夫	9
(3)	伝え合う活動のための工夫	11
(4)	単元構想のモデル	11
4	検証授業Ⅰの実施と考察	
(1)	検証授業Ⅰの概要	12
(2)	検証授業Ⅰの指導計画	13
(3)	検証授業Ⅰの実際	14
(4)	検証授業Ⅰの成果と課題	16
5	検証授業Ⅱの実施と考察	
(1)	検証授業Ⅱの概要	17
(2)	検証授業Ⅱの指導計画	19
(3)	検証授業Ⅱの実際	20
(4)	検証授業Ⅱの視点の工夫	21
(5)	検証授業Ⅱの成果と課題	27
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	28
2	今後の課題	28

I 研究主題設定の理由

今回の学習指導要領の改訂では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が小学校から系統的に設けられた。中学校では小学校との系統を意識して「伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てること」や「言語感覚を豊かにし、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てること」を重視している。古典の指導においても、生徒の発達段階を踏まえ、歴史的・文化的背景とも関連させながら、古来より受け継がれ親しまれている古典に触れさせ、日本語の美しい表現や古典独特のリズムを体感させたり、古典の世界の情景や人物の心情に触れさせたりするなど、古典に一層親しむ態度の育成を重視している。現代まで脈々と受け継がれてきた先人たちの知恵や、普遍的な人間の姿、長い歴史の中での移り変わりを、多感な時期の中学生が学ぶことは、まだ確立できていない自分自身に向き合い、自分のものの見方や考え方を見つめ直すことにつながる。つまり、自分自身の思考の基盤を広くすることができるのである。

本校の生徒の意識調査から、入学直後の1年生に比べ、2年生が古典の学習に意欲をもてない生徒が多いということが分かった。これまでの自分の古典指導を振り返ると、教科書教材のみを使用し、音読・暗唱させる活動を中心に、古語の意味や文語のきまりを教え、現代語訳で内容を捉えさせることに終始していた。これでは、生徒にとっては、教師の教えを受け取るだけの授業であり、古典を学ぶ本来の目的が不明確になり、古典に描かれた古人の思いやものの見方、内容の面白さに気付かせることができなかった。

そこで、本格的に古典の学習が始まる中学校での古典学習の在り方を考えていきたいと思う。本研究では、まず古典における身に付けさせたい力を整理し、ねらいを明確にした指導内容や指導法を工夫したい。また、古典への抵抗感を軽減させるために、古典を読むための基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせることや、現代語訳を提示することなどを工夫したい。さらに、生徒自身が古人の姿に共感したり、現代を生きる自分たちの姿と照らし合わせたりする主体的な読みの指導の充実を図りたい。複数の作品を比べて読み、作品について理解したことや古人への思い、また自分の経験と照らし合わせて感じた古典の面白さなどを、自分の言葉でまとめ、それを伝え合う活動を組み入れることで、古典の面白さに気づき、古典を読む意欲が高まるのではないかと考える。古典に親しみつつ古人や他者の思いに触れることで、自分自身を見つめ直し、自分の考えを深め、受け継がれてきた我が国の伝統的な言語文化を継承・発展させる態度を育てることができると考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

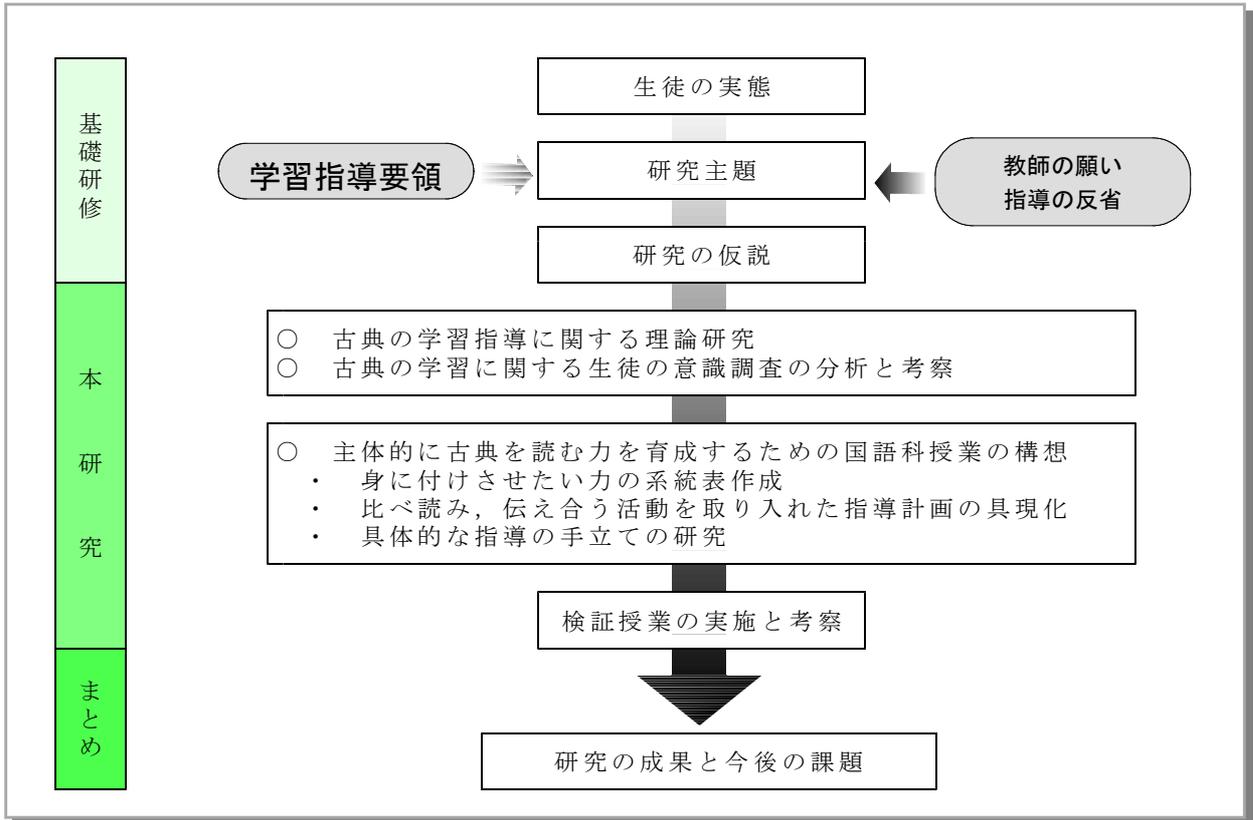
1 研究のねらい

- (1) 学習指導要領や文献等を基に、「伝統的な言語文化に関する事項」の指導における身に付けさせたい力を整理して、系統表を作成する。
- (2) 生徒を対象にした実態調査の分析から、古典の学習における課題を把握する。
- (3) 古典の主体的な読みができるような指導の在り方を明らかにする。
- (4) 検証授業の分析を基に、研究の成果と今後の課題を明らかにする。

2 研究の仮説

中学校の古典の指導において、身に付けさせたい力に基づいて、比べ読みをする活動や伝え合う活動を工夫すれば、古典を主体的に読み、古典に親しむ態度を育てることができるであろう。

3 研究の計画



III 研究の実際

1 研究主題に関する基本的な考え方

(1) 「古典を主体的に読む」とは

平成18年の「教育基本法」の改正により、「教育基本法」第二条（教育の目標）第五項には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」と明記された。それを受けて、今回の学習指導要領の改訂で「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が

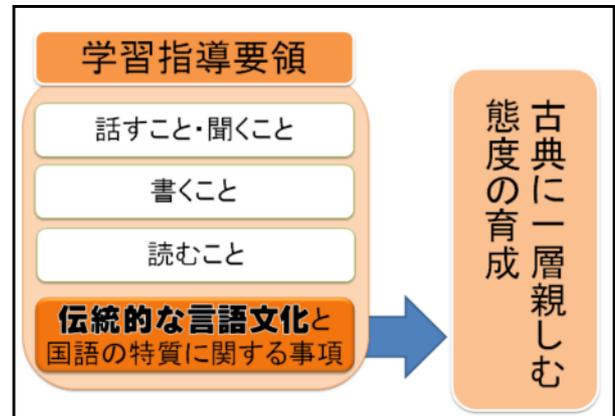


図1 学習指導要領の領域

新しく設けられ小学校低学年から「伝統的な言語文化」の学習が始まることとなった（図1）。中学校では、小学校との系統を意識して「伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てること」や「言語感覚を豊かにし、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てること」を重視している。学習指導要領解説によると「言語文化」とは、

- (1) 我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語
- (2) 実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語文化
- (3) 古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能など

となっている。中学校における古典の指導においては、「古典に触れる」「古典を楽しむ」「古典に親しむ」をねらいとした指導が求められ、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、古典に親しむ態度を育成する指導を重視している。「古典に親しむ態度」とはどのような態度であるか、中学校学習指導要領に具体的に明記されていないが、高等学校学習指導要領には「日常生活において古典や古典に関連する文章を読むことを通して、古典の中の人間の生活や人生を知り、自らの生き方を見つめ直すとともに進むべき方向を模索しようとする態度、また、古典などの表現から自らの思考や感情を表現する様々な方法を見だし、表現に生かそうとする態度」と書かれている。小学校から高等学校までの系統的な古典の学習を通して、古典に親しむ態度を育てるために、中学校ではどのような力を育成することが求められているのかを考えてみたい。

大村はまは、著書の中で「古人と自分たちとの、時をへだてて通い合うものをとらえさせてみたい。」^{*1}と述べている。「古典」とは、現代を生きる私たちとかけ離れたものではなく、時を隔てている古人と現代人をつなぐものである。生徒はそこに気付くことで、初めて古典に親しみを覚える。そこから、学ぶ意欲へとつながり、古典を学ぶ意義を理解すると考える。つまり、生徒が古典を読み、古人のものの見方や考え方に触れ、自分自身の生き方と照らし合わせることで、古人と自分たちとの間に通い合うものを感じることができると言える。そのような読み方が古典に親しむ態度の育成には必要である。

そこで、本研究における「古典を主体的に読む」とは、「生徒が自ら古典と向き合い、古人と現代を生きる自分の姿とを照らし合わせることで、ものの見方や考え方を広げること」と捉えることにした。

(2) 「伝統的な言語文化」における身に付けさせたい力

学習指導要領では、小学校低学年から〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の中に、「伝統的な言語文化」が系統的に位置付けられ、小学校低学年から系統的に古典に親しむ指導が行われるよう構成されている。これまで「読むこと」の領域で行っていた古典の指導が「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域とも関連させながら指導することになった。

また、中学校の「伝統的な言語文化に関する事項」は、各学年(ア)と(イ)の二つの系列に構成されており、次のような指導事項となっている。

- (ア) 古典に親しむために必要な知識を習得するとともに、それらを活用しながら読むことで、古典の世界に親しむ態度を形成することに関する指導事項
- (イ) 話すこと・聞くこと、書くことなど、様々な言語活動を通して、古典に関する知識を獲得することや現代を生きる自分を見つめる手掛かりを得ること、社会生活に古典を生かしていくことに関する指導事項

(ア)は、古典に親しむための、古典の特徴や内容の理解に関する事項であり、(イ)は、話すこと・聞くこと、書くことなど、様々な言語活動を通して、自分自身の考えを形成していくことに関する事項であると捉えた。そこで、言語文化における身に付けさせたい力を、小中学校の学習指導要領に示された指導事項やこれまでの先行研究を参考にしながら、次のように整理した(表1)。これらの指導事項は、一教材で身に付けさせようとするのではなく、系統性を考慮し、螺旋的^{らせん}反復的に指導していく必要がある。

*1 大村はま 『大村はま国語教室 第3巻』 1983 筑摩書房

表1 伝統的言語文化における身に付けさせたい力

(ア)	古典に親しむために必要な知識を習得するとともに、それらを活用しながら読むことで、古典の世界に親しむ態度を形成することに関する指導事項
①	昔話や神話などの読み聞かせを聞き取る力
②	易しい文語調の短歌や俳句について、リズムを感じ、音読・暗唱する力
③	文語調の文章を音読する力
④	文語のきまりや訓読の仕方を理解する力
⑤	古典の文章の独特のリズムに気付き、味わう力
⑥	現代語訳や語注などを手掛かりにして、作品の内容を理解する力
⑦	作品に描かれた情景や登場人物の心情を想像しながら読む力
⑧	作品を比べて読み、共通するものや違うものなどに気付く力
⑨	時代背景を踏まえた上で古典を読み、社会や自然など、作品の世界を理解する力
(イ)	話すこと・聞くこと、書くことなど、様々な言語活動を通して、古典に関する知識を獲得することや現代を生きる自分を見つめる手掛かりを得ること、社会生活に古典を生かしていくことに関する指導事項
⑩	昔話や神話などの読み聞かせを聞き、感想を発表する力
⑪	慣用句やことわざと生活を結び付ける力
⑫	身近な話題や日常生活に題材を見つけ、様々な種類の形式で作品を創作する力
⑬	古典に表れたものの見方や考え方に触れ、自分の考えを交流する力
⑭	古典を知識や体験と比べて読み、自分の考えを伝える力
⑮	古典の一節を引用して文章を書いたり発表したりする力

特に、次の表2は、中学校において身に付けさせる事項であると考え、より具体的な手立てを講じることにした。

表2 中学校において身に付けさせたい力

(ア)	④	文語のきまりや訓読の仕方を理解する力
	⑤	古典の文章の独特のリズムに気付き、味わう力
	⑥	現代語訳や語注などを手掛かりにして、作品の内容を理解する力
	⑦	作品に描かれた情景や登場人物の心情を想像しながら読む力
	⑧	作品を比べて読み、共通するものや違うものに気付く力
(イ)	⑨	時代背景を踏まえた上で古典を読み、社会や自然など、作品の世界を理解する力
	⑬	古典に表れたものの見方や考え方に触れ、自分の考えを交流する力
	⑮	古典の一節を引用して文章を書いたり発表したりする力

また、教科書教材と身に付けさせたい力を関連付けた、古典教材一覧を作成した(表3)。小中学校の学習指導要領を基に、小学校1年生から中学校3年生までの古典教材における学習のねらいや身に付けさせたい力を整理し、言語活動例を考え、位置付けた。これにより、小中学校の系統性を踏まえた指導に生かすことができると考える。

表3 古典教材一覧（小学校：光村図書，中学校：三省堂）

学習指導要領		教材名	学習のねらい	身に付けさせたい力	言語活動例
(7) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること	(小) 1年	○まのいい りょうし	○ 読み聞かせを聞きながら、登場人物の行動を中心に、場面を想像することができる。	①	昔話の読み聞かせを聞き、感想を発表する。
		○むかしばなしが いっぱい	○ 昔話や伝承などの本や文章を読んだり、読み聞かせを聞いたりし、感想を発表することができる。 ○ 好きな昔話の本を進んで読むことができる。	① ⑩	読んだ本について、好きなところを紹介する。
	(小) 2年	○いなばのしろうさぎ	○ 人物の行動を中心に場面の様子を想像しながら読み聞かせを聞き、内容や感想について聞いたり話したりすることができる。 ○ 知っている昔話・伝承や読み聞かせてもらいたい話などについて、発表し合うことができる。	① ⑦ ⑩	神話の読み聞かせを聞く。
		○三まいのおふだ	○ 読み聞かせを聞き、場面の様子について登場人物の行動を中心に想像を広げることができる。	① ⑦ ⑩	昔話の読み聞かせを聞く。
(7) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること	(小) 3年	○声に出して読もう ・良寛・松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶	○ 知っている言葉を手掛かりに情景を想像したり日本語特有のリズムを感じたりしながら短歌や俳句を音読し、文語の調子に親しむことができる。	② ③ ⑪	音読したり暗唱したりする。
		○声に出して読もう ・松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶 ・紀友則・安倍仲磨・百人一首(18首)	○ 知っている言葉を手掛かりに情景を想像したり、日本語特有のリズムを感じたりしながら短歌や俳句を音読し、文語の調子に親しむことができる。	② ③ ⑪	音読したり暗唱したりする。
	(小) 4年	○声に出して楽しもう ・小林一茶・与謝蕪村・松尾芭蕉 ・光孝天皇・山部赤人・蛸丸 ・故事成語「蛇足」「五十歩百歩」	○ 文語調の短歌や俳句を音読して、情景を想像しながら、日本語特有のリズムを感じ取ることができる。	② ③ ⑪	音読したり暗唱したりする。
(7) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること	(小) 5年	○声に出して読もう ・竹取物語・枕草子・平家物語 ○季節の言葉 ・式子内親王・松尾芭蕉 ・森川許六・菅原道真	○ 古典の文章を音読し言葉の響きやリズムを味わうとともに、文章の内容の大体を知ることができる。 ○ 昔の人のものの見方や感じ方について知ることができる。	③ ⑬	音読する。
		○声に出して読もう ・「論語」 ・徒然草「高名の木のぼり」			
	(小) 6年	○伝統文化を楽しもう ・伝えられてきたもの ・狂言柿山伏	○ 柿山伏を読み、役割を決めて自分の思いが伝わるように音読することができる。 ○ 昔の人のものの見方や感じ方を知ったり、時間の経過による言葉の変化に気付いたりすることができる。	③ ⑦ ⑬	役割を決めて、感情を込めて音読発表会をする。
○季節の言葉「春」 ・「春暁」孟浩然 ・「春宵一刻值千金」蘇軾 ○季節の言葉「夏」 ・松尾芭蕉 ○季節の言葉「秋」 ・「静夜思」李白 ・藤原定家・小林一茶・松尾芭蕉		○ 漢詩や漢文に触れ、独特のリズムを感じ取ることができる。 ○ 文語調の短歌や俳句の内容を知り、情景や心情を想像しながら音読することができる。	③ ⑤	リズムを感じながら音読する。	
(7) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること	(中) 1年	○声に出して、様々な作品を読もう ・詩・短歌・俳句・枕草子 ・徒然草・平家物語・漢詩・論語	○ 様々な種類の作品の音読を通して、文語のきまりなどを知る。	④ ⑤	気持ちや想像したり、リズムを感じたりしながら音読する。
		○竹取物語 ・冒頭部分・蓬萊の玉の枝 ・昇天場面	○ 古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れる。	④ ⑤ ⑥ ⑧ ⑬	「竹取物語」の面白さを紹介する。
		○故事成語を使って書こう ・矛盾	○ 題材の用い方について感想を交流する。	④ ⑪	故事成語を使ってショートストーリーを作る。
(7) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと	(中) 2年	○枕草子・第145段・第207段 ○徒然草・第52段・第92段	○ 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や筆者の思いなどを想像する	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑭	徒然草を比べて読み、考えを交流する。
		○漢詩の世界 ・黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る ・春望・絶句	○ 漢詩の特徴を生かして朗読するなどし、古典の世界を楽しむ。	④ ⑤ ⑦ ⑬	情景や心情を想像しながら音読する。
		○平家物語 ・冒頭部分・敦盛の最期	○ 描かれた場面を想像し、登場人物の生き方について考える。	⑤ ⑥ ⑦ ⑬	登場人物の行動や心情について、意見を交流する。
(7) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと	(中) 3年	○おくの細道 ・月日は・平泉	○ 歴史的な背景を考えながら古文を読み、古典の世界に親しむ。	⑥ ⑦ ⑨ ⑭	ほかの章段も読み、芭蕉の旅への思いを考える。
		○中国の古典の言葉 ・『書経』、『漢書』、『後漢書』 『十八史略』、『史記』、『論語』	○ 漢詩の一節を利用して、自分の体験や考えを文章にまとめる。	⑤ ⑥ ⑨ ⑮	中国の古典の言葉の一節を引用し、文章を書く。
		○好きな和歌を紹介しよう ・万葉集8首 ・古今和歌集4首 ・新古今和歌集4首	○ 書いた文章を交流し、自分の表現に役立てている。	⑤ ⑦ ⑨ ⑮	好きな和歌を紹介する文章を書く。

(3) 比べ読みの活動と伝え合う活動とは

ア 比べ読みの活動とは

今回の学習指導要領の改訂では、「比較する・比べる」という言葉がキーワードの一つとなっている。「比較する・比べる」というのは、二つの情報を照らし合わせ、「共通していること」や「違うところ」に着目して思考を展開することである。古典の学習における比べ読みについて、岩崎は「古典学習において、比較という方法は極めて有効である。二つ以上のものを比べ、それぞれに共通する点や相違する点に着目し、それを出発点として考えていくのである。文章を比較しながら読むことによって、それぞれの文章を別々に学習したときには気づかなかったことに容易に気づかせることができる」^{*2}と述べている。また、高等学校学習指導要領の古典A・古典Bには「図書館を利用して古典などを読み比べ、そこに描かれた人物、情景、心情などについて、感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりすること。」「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。」という言語活動例が示されている。さらに、解説では『読み比べ』することで、生徒は、文章を課題意識をもって主体的に読むことができる。」と明記されている。これらのことから、生徒が自らの姿と照らし合わせ、古典に表れたものの見方や考え方に触れるために、古典の学習における「比べ読み」は効果的であると見え、その効果を整理してみた。

まず、複数の作品または文章を比べて読むことで、一つの文章だけでは気付きにくいことにも気付きやすくなり、そこから新しい発見が生まれる。何かに気付かせたいときや実感させたいときに、比べ読みは有効であり、そこでの発見は、古典を学ぶ意欲や関心にもつながると考える。

次に、課題意識をもって読むことができるということである。課題の解決のために、複数の文章を共通点や相違点といった視点を与えて読ませることで、思考力や判断力を働かせ続けることになる。

さらに、多くの古典の文章や作品に触れるということである。現在の教科書教材には限られた古典作品の一部が掲載されている。しかし、比べ読みでより多くの古典に触れる機会をもたせることで、古典の価値を見いだしたり、読み継がれてきた意味を理解したりすることができると思う。

イ 伝え合う活動とは

伝え合う活動とは、比べ読みの活動を通して、自ら古典と向き合い発見したこと、理解したこと、感じたこと、考えたことを、文章にまとめたり、発表したり、交流したりすることである。

その効果をまとめると、まず、文章の理解を深められるということである。最終的に何らかの形で表現するという目的があるので、より主体的に古典を読もうという態度が育成できると考える。

次に、交流を通して、他者の考えに触れ、自分の知識や価値観に照らすことで、自分の考えを更に深めていくことができるということである。

こうした生徒自身の内面的な変化、つまり思考の深まりを表現させることは、古典の価値を再確認したり、新たな価値を発見したりすることにつながると考える。

*2 岩崎淳 『岩崎淳国語教育論集Ⅱ 古典に親しむ』 2010 明治図書

2 生徒の意識調査の分析と考察

(1) 古典の学習に関する意識調査の分析と考察

(アンケート実施 平成24年6月 対象 出水市立出水中学校 1・2年生 203人)

「古典の学習が好きか」という問いに対して「好き」「どちらかという好き」と肯定的な回答をした生徒は、1年生では54%、2年生では39%となっており、学年が上がると古典好きの生徒が減っていることが分かった。古典学習で楽しいと感じる学習を見てみると、「リズムを感じながら音読や暗唱する」ことや「古語の意味や使い方を知る」こと、「古人の考えに共感したり違いを見つけたりする」ことなどの学習内容で、2年生はいずれも40%に満たない(図2)。このことから、2年生が古典に対して抵抗感を持っていることが分かる。また、「古典の学習は将来役に立つと思うか」という問いでは、「役に立つ」・「やや役に立つ」と肯定的な回答をした生徒は、1年生が62%であるのに対し、2年生では30%であった(図3)。2年生の古典への抵抗感は、古典を学ぶ意義を見いだせないことが原因の一つであると考えられる。そして意欲をもてない大きな理由の一つに、歴史的仮名遣いの読みについての定着が十分に図られていないことが考えられる。

また、「言葉が難しい」や「読み方が分からない」といった授業中の生徒の声からも、古語に対して抵抗感があると考えられる。仮名遣いが分からなければ、古典特有のリズムを感じながらの音読はできない。言葉の句切りが分からず意味も捉えられない。したがって、古文全体の内容が理解できず、古人の心に触れることができないのではないかと考える。

しかし、古典学習に対して否定的な回答をした生徒も、学習したい内容についての質問では「昔の言葉の意味や使い方を知りたい」46.7%や「当時の暮らしぶりや時代背景を知りたい」48.6%と、全くの無関心ではないことが分かる(図4)。

そこで、まずは古語に対する抵抗感を軽減させ、古典に親しむ態度を引き出すために、歴史的仮名遣いの読みや古語の使い方など古典を読むことに関連する、文語のきまりを身に付けさ

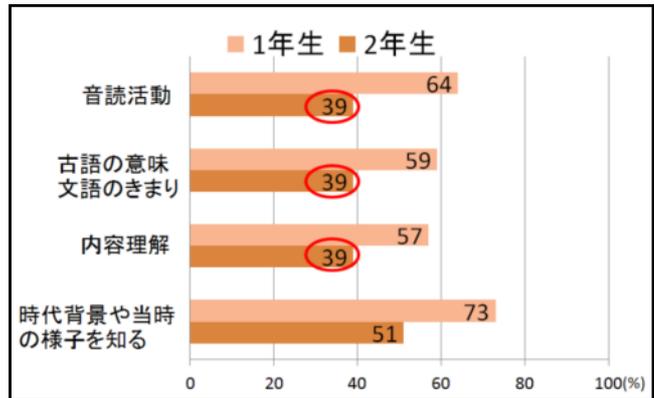


図2 「楽しいと感じる学習内容について」の意識調査

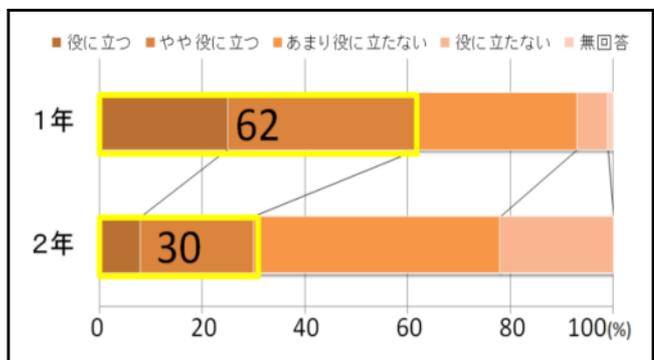


図3 「古典学習は将来社会に出て役に立つと思うか」の意識調査

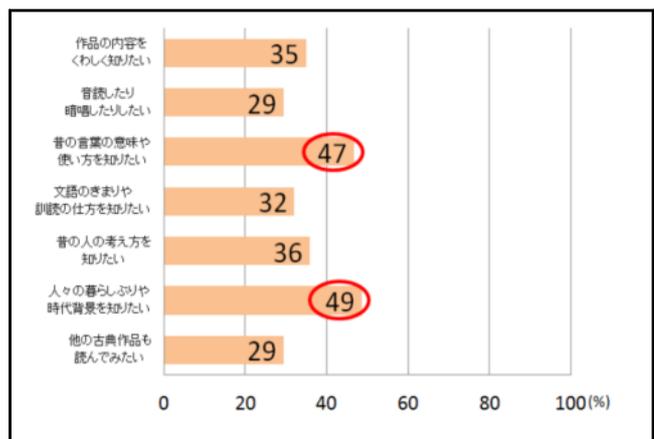


図4 古典学習において、学習したい内容についての意識調査(「古典が好き」に対して否定的な回答をした生徒)

せる指導が必要だと考えた。その上で、比べ読みの活動と伝え合う活動を取り入れ、古典に親しむ態度を育てていくことにした。

(2) 調査結果から設定した研究の視点

実態調査の分析と考察から、生徒が主体的に古典を読むための指導の工夫改善の視点を、身に付けさせたい力と関連付けて、次の三つにまとめた。

視点1： 古典における基礎的・基本的な知識・技能を定着させ、古典に対する抵抗感を軽減させる工夫	
④	文語のきまりや訓読の仕方を理解する力
⑤	古典の文章の独特のリズムに気付き、味わう力
⑥	現代語訳や語注などを手掛かりにして、作品の内容を理解する力
視点2： 比べ読みの活動で、生徒が古典と積極的に向き合うための工夫	
⑦	作品に描かれた情景や登場人物の心情を想像しながら読む力
⑧	作品を比べて読み、共通するものや違うものに気付く力
視点3： 伝え合う活動で、関心・意欲を高め、読みを深める工夫	
⑬	古典に表れたものの見方や考え方に触れ、自分の考えを交流する力
⑭	古典を知識や体験と比べて読み、自分の考えを伝える力

視点1では、特に歴史的仮名遣いの定着を図り、リズムを感じながら音読することにつながっていきたい。その上で、主教材である教科書教材の内容を理解させるための工夫を行いたい。これらは、古典学習に対する抵抗感を軽減させることになり、古典を読む意欲につながると考える。

視点2では、生徒が古典に向き合い、新しい発見をしたり理解したりするために、比べ読みを行うことで、気付かせたいこと、実感させたいことを整理したい。また、教材や資料、ワークシートの工夫を行うことで、生徒が積極的に古典を読めるようにしたい。

視点3では、比べ読みで理解したことや考えたことを、「伝え合う」という活動を通して更に深めさせたい。伝え、交流することで「古典は面白い。」「古典には、こんな知恵が書かれているんだ。」ということを再認識させたい。また、伝えることを意識することで、自分自身がより深く理解しようとする意欲を高めさせたい。生徒の実態に合わせた、交流の場の設定を工夫したい。

3 生徒が主体的に古典を読むための国語科授業の構想

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着のための工夫（視点1）

古典学習の指導では、古典特有のリズムに親しませ、内容を味わわせる指導が、小学校から系統的に行われる（図5）。中学校では小学校の指導を踏まえて指導することが大事である。古典特有のリズムを味わいながら古典を読むためには、文語のきまりや訓読の仕方を理解していなければならない。

本校生徒の実態をみると、歴史的仮名遣いの読みに関して、授業前の確認テストの結果は、15問中の平均正答数は1年生で7.0問、2年生で6.8問であった。歴史的仮名遣いについては、1年生の4月に学習しているが、その定着については、1年生2年

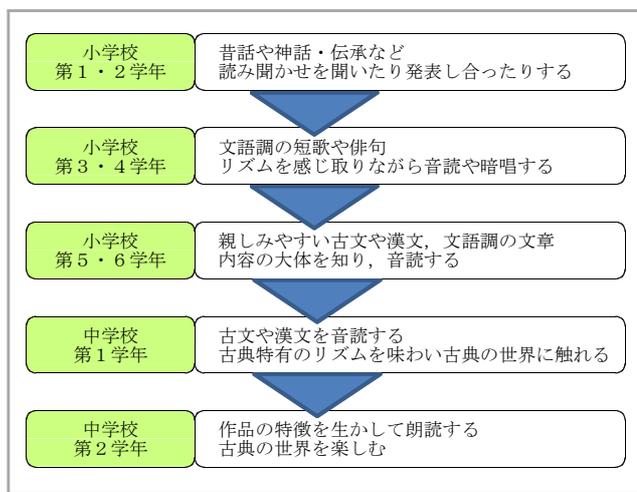


図5 学習指導要領における音読等についての系統

生共に不十分であった。歴史的仮名遣いの読み方を定着させることが、リズムを味わいながら音読したり朗読したりすることにつながっていく。そこで、歴史的仮名遣いの読みの定着のための手立てを講じることにした。

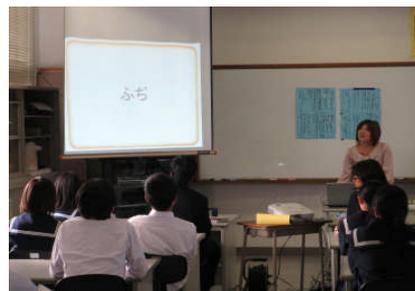
『教育の情報化に関する手引』（文部科学省）には「ICT を用いたフラッシュ型教材等を活用させることで、児童生徒が集中して取り組むことができ、効率的に知識を定着させることができる」と明記されている。知識を定着させるためには重要な繰り返し練習は、ともすれば単調になりがちであるが、ICT を活用することで、変化に富んだ練習が可能になり、生徒の意欲を高めることができるのではないかと考えた。そこで、歴史的仮名遣いの読みの定着のために、ICT を用いたフラッシュ型教材を活用することにした。

【フラッシュ型教材とは】

フラッシュ・カードのように、課題を瞬時に次々と提示するデジタル教材のこと。

【フラッシュ型教材の活用の方法】

- (1) 毎時間授業の始まり2分間で行う。
- (2) はじめの画面に提示された歴史的仮名遣いの古語を、声に出して読む。(1秒間)
- (3) 次の画面に提示された、現代仮名遣いを読んで確認する。(1秒間)



このように、歴史的仮名遣いをきちんと習得させ、言葉のまとまりを意識させることで、音読活動がスムーズに行われることになる。

また、音読活動についても指導の過程において次の表4のような様々な活動を取り入れたい。

表4 音読活動の種類

音読の種類	方法	ねらい
追い読み	教師が読んだ文と同じ文を、後を追いつつながら生徒が読む	正確に読ませる 仮名遣い、言葉のまとまりを意識させる
一斉読み	同じスピードで読むように、教師も大きな声で音読する	全員に読む機会を保障する 何回も読ませる
一人読み	一斉に自分のペースで読む	自分のペースで正しく読ませる
一人一文読み	教師と生徒で交互に読む	段落やまとまりを把握させる
リレー読み	ひとまとまりの区切りでリレーしながら読む	段落やまとまりを把握させる
役割読み	登場人物の役割を決めて、通して読む	読解に役立たせる
ペア読み	読み役と聞き役になり、ペアで読み合う お互いにアドバイスを行う	相手の読みを聞くことで、自分の読みの間違いや、足りないところに気付かせる
交互読み	男女別、列ごとで読む	雰囲気を変えることで、新たな読みの視点に気付かせる

このように音読活動を使い分ける工夫を行うことで、読みの習熟が図られ、古文独特の表現やニュアンス、リズムを捉えさせることができる。

(2) 比べ読みのための工夫（視点2）

ア 教材選定について

比べ読みのためには、教科書教材を主教材とした副教材の選定が大切になってくる。中学校学習指導要領によると、教材選定に当たっては、学習意欲をもって学習に取り組めることや、意義や喜びが自覚できるように、教材の表現や内容の難易、分量、生徒の興味・関心等に配慮しながら、選定できるようになっている。特に、古典の授業で扱う教材については、学習指導要領の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」3の(5)に次のように示されており、原文以外の教材の使用が可能である。

(5) 古典に関する教材については、古典の原文に加え、古典の現代語訳、古典について解説した文章などを取り上げること。

古典の原文は、特有のリズムを味わったり、文語のきまりを知ったりする上で有効であるが、中学校における古典の指導は原文でなければならないというものではない。古典に親しみをもてるように内容を概括させたり、理解を深めたりするために、分かりやすい現代語訳や内容を解説した文章を、実態に応じて適切に取り上げるべきである。

イ 系統性を重視した比べ読みについて

(ア) 比べる対象について

次に、古典学習で比べ読みをする際の、比べる対象を考えた。先に教材選定の観点でも述べたとおり、主教材の教科書作品と比べ読みするための副教材について、同一の作品を比べる場合と複数の作品を比べる場合に分けて次のように整理した(表5)。指導のねらいを踏まえ、生徒の実態に応じて比較すべき作品を決定し、入念な教材分析の後、単元を構想していきたい。

表5 古典学習における比べる対象

同一の作品を比べる	<ul style="list-style-type: none"> ○ 同じ昔話について、複数の絵本を比べる ○ 同じ昔話について、絵本と現代語訳を比べる ○ 同じ作品について、複数の出版社の文章を比べる ○ 同じ作品について、複数の現代語訳に書き直した文章を比べる ○ 同じ作品について、現代語訳に書き直した文章と、漫画を比べる ○ 原文と現代語訳に直した文章を比べる ○ 同じ昔話について、出版された時代の違う作品を比べる
複数の作品を比べる	<ul style="list-style-type: none"> ○ 同じ作者の複数の作品を比べる ○ 同じテーマをもつ、複数の作品を比べる ○ 同じテーマをもつ、違うジャンルの複数の作品を比べる ○ 同じテーマをもつ、文章と和歌や俳句を比べる ○ 一つの作品の、複数の章段を比べる ○ 同じ作者の、複数の和歌や俳句を比べる ○ 同じテーマをもつ、古典作品と現代の文章を比べる

(イ) 比べ読みにおける実感させたいこと

古典学習の目標は「古典に触れる」「古典を楽しむ」「古典に親しむ」という系統になっている。比べ読みを行わせるためには、何と何を比較させ、そこから何を実感させるかが大事である。そこで、学年ごとに目標に応じた比べ読みを行うために、学習指導要領の指導事項を基に、比べ読みを通して生徒に実感させたいことを整理した(表6)。

表6 古典で実感させたいことと比較する教材例

学年	目標	実感させたいこと	比較する教材例
1年	古典に触れる	古典は時を超えて、今に受け継がれてきているということ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 絵本「かぐやひめ」 ○ 「竹取物語」の現代語訳
2年	古典を楽しむ	古人の考えは、現代にも通じるものがあるということ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「徒然草」第五二段・第九二段 ○ 「徒然草」の他の章段
3年	古典に親しむ	古典で得た知恵を、生活に生かしていること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」 ○ 現代短歌

このように、比べ読みをして上記のようなことを実感させることができたならば、現代まで読み継がれてきた古典が、私たちの生活とかけ離れたものではないことを実感し、親しむ態度が身に付くのではないかと考える。

(3) 伝え合う活動のための工夫（視点3）

単元の目標や指導事項並びに生徒の実態に応じて、伝え合う活動を指導計画に位置付けていきたい。本研究では、表7のような伝え合う活動を想定した。思考の場面に合わせて、単元の中に組み入れたい。

表7 伝え合う活動例一覧

思考の場面	伝え合う活動例	表現する手段
・理解する・気付く	自分の考えを整理し、発表する。	・ノート ・ワークシート
・組み立てる・比べる	自分の意見を書いて表現する。	・意見文 ・紹介文 ・新聞 ・フリップ
・想像する・まとめる	自分の意見を他の人に説明する。	・スピーチ ・プレゼンテーション
・深める・広げる	他人の意見や自分の意見を交流する。	・意見交換 ・ディベート ・ポスターセッション・バズセッション

(4) 単元構想のモデル

基礎的・基本的な知識・技能を定着させるためには、短時間でも毎時間続けることが大事であると考えます。そこで、基礎的・基本的な知識・技能を定着させる手立てを毎時間取り入れ、主体的に古典を読むために比べ読みと伝え合う活動を効果的に位置付けた単元を構築するためのモデルを考えた（図6）。

比べ読みの活動と伝え合う活動を通して、教科書教材の内容理解をより深めることを目的としていることから、教科書教材の内容を理解させたあと、比べ読みを行うことに留意したい。

次	学習活動	比べ読みの活動と伝え合う活動を位置付けた単元構想
導入	1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 写真やスライドなど視覚的資料を用いる。 視点1：基礎的・基本的な知識・技能の定着のための手立て <ul style="list-style-type: none"> ・ ICTを用いたフラッシュ型教材により繰り返し練習させる。 ・ 様々な形態による音読活動を行わせる。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現代語訳や注釈を参考にあらすじや内容を理解させる。
展開1	3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題に沿って考えたこと、自分の意見をワークシートやノートにまとめさせる。
	4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 視点2：比べ読みのための手立て <ul style="list-style-type: none"> ・ 副教材は現代語訳を使用して抵抗感を軽減させる。 ・ 観点を示したワークシートで主体的な読みを促す。 ・ 個→グループ学習の形態を用いる。
	5	
展開2	6	<ul style="list-style-type: none"> ○ 視点3：伝え合う活動のための手立て <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の実態に合わせた活動を設定する。 ・ 分かりやすく伝えるために発表シートを作成する。
	7	
終末		<ul style="list-style-type: none"> ○ 深まった自分の考えをまとめさせる。

図6 単元構想モデル

このように、研究の視点1から3を単元に取り入れ構築することで、古典を主体的に読み、古典に親しむ態度を育てることができると考え、第1学年と第2学年で検証授業を行った。また、単元の指導計画を立てる際に、言語活動シートを作成し、単元目標や言語活動のねらいを常に確認できるようにした。これは、学習指導要領の指導事項と身に付けさせたい力を焦点化し、単元目標を定め、それを踏まえた評価規準を設定し、さらに、生徒の実態を考慮して、比べ読みと伝え合う活動を取り入れた言語活動を具体化して、一枚のシートにまとめたものである(表8, 表11)。

4 検証授業Ⅰの実施と考察

(1) 検証授業Ⅰの概要

検証授業Ⅰで学習する「竹取物語」は、平安時代に成立したといわれる日本最古の物語である。現在でもおとぎ話「かぐやひめ」として広く愛されており、本格的に古典を学び始める中学1年生にとって親しみやすい作品である。教材として、小学校から高等学校まで取り扱われており、小学校では、冒頭部分を声に出して読む学習が行われている。中学校では、物語の冒頭部分に加え、かぐや姫が月へ帰って行く場面について、原文と現代語訳が上下に並べて掲載されている。古語の意味や文語のきまりなど、古典の基礎的事項を学ぶのに適した作品であると考えられる。何度も音読して古典のリズムに慣れさせたり、古典の仮名遣いに触れさせたりして、古典に親しませたい。

また、比べ読みの教材としては、身近にある絵本を使用した。話が短くまとめられており、作品全体のあらすじが捉えやすく、また、描かれた絵から当時の様子がよく分かり、興味・関心を抱きやすいと考えた。また、共通点を読み取らせることで、古典が現代とかけ離れたものではないことに気付かせ、相違点から、自分の知らなかった物語の面白さや今とは違う当時の人々の考え方に触れさせたい。「竹取物語」が長い年月を経て、今なお読み継がれてきていることの意味を考えさせたいと考えたからである。

視点1： フラッシュ型教材の活用と音読活動の工夫を取り入れる。

視点2： 「古典は時を超えて、今に受け継がれてきているということ」を実感させるために、絵本と現代語訳の比べ読みを取り入れる。

視点3： 「竹取物語」の面白さを、フリップボードを使い全体に紹介する伝え合う活動を取り入れる。

ア 単元名及び実施期間

単元名：「竹取物語」の面白さを紹介しよう

実施学年：出水市立出水中学校 1年5組 男子19人 女子17人 計36人

実施期間：平成24年7月4日～7月10日

イ 言語活動について

検証授業Ⅰでは、絵本「かぐやひめ」とそれに対応する現代語訳の比べ読みをさせ、そこから読み取ることのできる共通点や相違点に気付かせようとした。伝え合う活動では、比べ読みで気付いたことから、「竹取物語」の面白さを、フリップボードを使って分かりやすく紹介させ、終末では「竹取物語」が千年以上読み継がれている魅力を考えさせ、まとめさせた(表8)。

表 8 検証授業 I の言語活動シート

第1学年 「竹取物語」言語活動計画シート		
1 単元について		
単元名	比較して読み、「竹取物語」の面白さを紹介しよう	
2 指導事項		
	伝統的な言語文化	読むこと
	ア (7) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。 (4) 古典には様々な種類の作品があることを知ること。	エ 文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分のものの見方や考え方を広げること。
3 身に付けさせたい力		
	<input type="checkbox"/> 歴史的仮名遣いや古語が正しく読める力 <input type="checkbox"/> 古典特有のリズムを味わう力 <input type="checkbox"/> 課題に沿って文章を読み、その内容を紹介しようとする力	身に付けさせたい力 ④ ⑤ ⑧ ⑬
4 単元目標		
(1) 古典の文章に関心を持ち、調べたことを交流しようとする。(関心・意欲・態度) (2) 現在の絵本と古典の現代語訳を比べ読みし、内容の違いや新しく知ったことを紹介することができる。(読むこと) (3) 発表会を通して、「竹取物語」の面白さを探り、自分のものの見方、考え方を広げることができる。(読むこと) (4) 文語のきまりを知り、古典特有のリズムを感じながら音読することができる。(伝統的な言語文化)		
5 評価規準		
国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
(1) 古典の文章に関心を持ち、調べたことを進んで紹介しようとしている。	(1) 絵本と古典の現代語訳を比べ読みし、内容の違いや新しく知ったことを知り、紹介している。 (2) 発表会を通して、自分のものの見方や考え方を広げている。	(1) 歴史的仮名遣いや文語のきまりを理解している。 (2) 古典独特のリズムを感じながら音読したり暗唱したりしている。
6 生徒の実態		
<input type="checkbox"/> 本格的な古典の学習は初めてである。 <input type="checkbox"/> 歴史的仮名遣いの読みの定着が不十分である。		
7 比べ読みと伝え合う活動を取り入れた言語活動		
比べ読みについて		
【比べる教材】	【目的】	
絵本「かぐやひめ」 「竹取物語」の現代語訳	<input type="checkbox"/> 古典は今も受け継がれてきていることに気付かせる。 <input type="checkbox"/> 比べ読みを通して、「竹取物語」の面白さに気付かせる。 <input type="checkbox"/> 発表会を通して、読み継がれてきている「竹取物語」の魅力を考えさせる。	
伝え合う活動について		
<input type="checkbox"/> 伝え合う方法 フリップボードで面白さを紹介する		
<input type="checkbox"/> 選んだ理由 ・ 他者へ紹介したい竹取物語の面白さについて、根拠に基づいた発表が容易にできる。 ・ フリップを作成するに当たって、イラストを描いたり、短い言葉で分かりやすく表現したりするため、意欲的な活動につながり、古典への親しみが湧く。		

(2) 検証授業 I の指導計画

単元のねらいや指導事項、取り上げる言語活動を確認し、全6時間で指導計画を作成した(表9)。初めての本格的な古典学習なので、リズムを感じながら音読する活動を毎時間取り入れるとともに、比べ読み、伝え合う活動を設定することで様々な文章に触れ、進んで古典を読み味わおうとする生徒を育てたい。特に、絵本という親しみのある身近なものを教材とすることで、古典は現代まで受け継がれ、読み継がれているということに気付かせたい。

表 9 検証授業 I の指導計画

時	主な学習活動	活動	主な手立て	評価の観点と方法
1	<p>歴史的仮名遣いや文語のきまりに慣れよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 単元目標を知り，学習計画を立てる。 ○ 竹取物語について知っていることを確認し合う。 ○ 歴史的仮名遣いの読みの確認をする。 ○ 現代語訳を参考にして古語の意味を捉える。 	文語のきまりの理解	<ul style="list-style-type: none"> ・ フラッシュ型教材を使い，歴史的仮名遣いについて定着を図る。 ・ 毎時間授業の始めに繰り返し練習させる。 <p>身に付けさせたい力④</p>	<p>[言語についての知識・理解・技能(1)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 観察・ワーク
2	<p>「竹取物語」の冒頭部分を繰り返し音読して，古典のリズムに慣れよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 冒頭部分の原文を暗唱できるまで音読する。 ○ 現代語訳を参考にしながら内容を捉える。 	音読	<ul style="list-style-type: none"> ・ 暗唱できるようになるまで繰り返し音読練習の時間を取る。また，一斉読み，ペア読み，追い読みと形式を工夫する。 <p>身に付けさせたい力⑤</p>	<p>[言語についての知識・理解・技能(1)(2)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 観察
3	<p>教科書の「昇天の場面」と絵本を比べ読みし，面白さを見つけよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 古典のリズムを感じながら音読する。 ○ 現代語訳であらすじを捉える。 ○ 絵本の教科書の場面と対応する場面を比べながら読み，共通点と相違点を探し，まとめる。 	比べ読み	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現代語訳であらすじを確認してから，比べ読みさせる。 ・ ワークシートを使い，共通点と相違点を探させ，そこから面白さを考えさせる。 <p>身に付けさせたい力⑧</p>	<p>[読むこと(1)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 観察 ・ ワークシート
4 5	<p>教科書以外の場面と絵本を比べて読みし，面白さを見つけよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 各班で課題の場面を読む。 <ul style="list-style-type: none"> ア かぐや姫の成長の場面 イ 蓬萊の玉の枝の場面 ウ かぐや姫の秘密の場面 エ 十五夜の場面 オ 天人登場の場面 カ ふじの煙の場面 	比べ読み	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発表例を示し，どのように紹介するのかイメージをもって取り組ませる。役割を決め，全員が発表に参加できるようにする。 <p>身に付けさせたい力⑧</p>	<p>[国語への関心・意欲・態度]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 観察
6	<p>発表会で「竹取物語」の面白さを分かりやすく紹介しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 各班が発表を行う。 ○ 発表が終わったら，現代まで千年以上読み継がれている「竹取物語」の魅力について考えて文章にまとめる。 	伝え合う活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事前にリハーサルを行い，スムーズに発表できるようにする。 ・ 竹取物語の魅力について書く前に，意見文の書き方の指導を行う。 <p>身に付けさせたい力⑬</p>	<p>[国語への関心・意欲・態度]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 観察 <p>[読むこと(2)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシート

(3) 検証授業 I の実際

ア 視点 1：基礎的・基本的な知識・技能の定着のための工夫

(ア) 「文語のきまりを理解する」(身に付けさせたい力④)のための工夫

まず，歴史的仮名遣いの読みがどれだけ定着しているかを確認するために，授業に入る前に確認テスト(図 7)を行った。問題については，4月に初めて歴史的仮名遣いを学習した際の，教科書に掲載されている例語である。その結果，授業前は全15問中，平均正答数は7問と，ほとんど定着していないことが分かった。

そこで、毎時間授業の始まりに ICT を用いたフラッシュ型教材を活用した。確認テストと同じ問題から始めていき、その後、教科書に出てくる古語を増やしていった。繰り返し活動させることで歴史的仮名遣いの読みの定着が図られた（図8）。また、全員で声を出すことで、クラス全体に活気が出て、授業の導入部分における雰囲気作りに役立った。

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
やうやう	つひに	けふ	れう	きふ	あやしう	あふぎ	まうす	にほふ	かは	わづか	ふぢ	そとこ	こゑ	まゐる

歴史的仮名遣いについての確認
一年（組）（番）（ ）
次の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いで書きなさい。

図7 「歴史的仮名遣い」読み確認テスト

(イ) 「古典のリズムを味わう」(身に付けさせたい力⑤) ための工夫

「竹取物語」の冒頭部分の音読活動において、毎時間、一斉読みやペア読みを取り入れることで、意欲的に取り組んでいる姿が見られ、古典特有のリズムを感じることができたと考える。

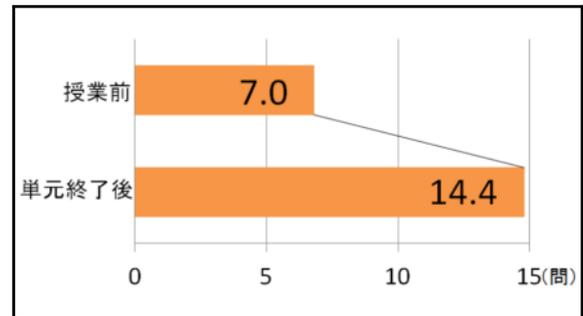


図8 「歴史的仮名遣い」の読み確認テストの正答数

イ 視点2：比べ読みのための工夫

「作品を比べて読み、共通するものや違うものに気付く力」(身に付けさせたい力③)を育てるために、教材については、教科書以外の場面の現代語訳と絵本を活用した。教科書に掲載されているのは、冒頭の部分と昇天場面、そして5人の貴公子の求婚の場面を解説した文章のみである。そこで、生徒のほとんどが触れたことのある絵本『かぐやひめ』と、それに対応する現代語訳を教材として使用した（図9）。自分たちの知っている話が千年以上前の原典にはどのように記述されているのか、どのような違いがあるのか、また、絵本には書かれていない部分はどこかなどに気付かせることができる。共通点や相違点に気付くことで、古来より受け継がれてきた考え方や現代とは違うものの見方などを知ることができる。そのためにも、親しみのある絵本が最適な教材であると考えた。

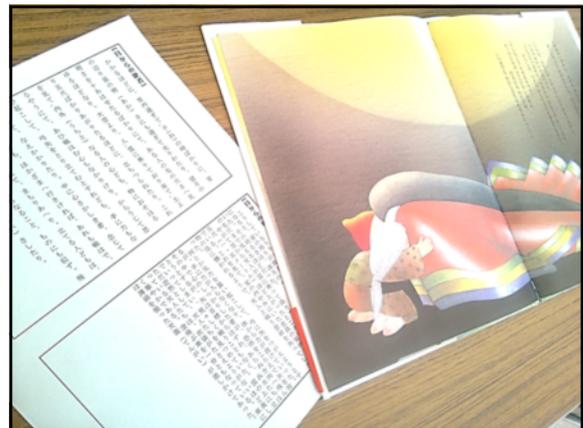


図9 比べ読み資料の現代語訳と絵本

比べ読みは現代語訳で取りまさせるが、同時に原文にも触れられるよう、現代語訳の上に原文も掲載した。物語を六つの場面に分け、各班で選んだ一つの場面で取りまさせた。観点を示したワークシート（図10）を用い、観点ごとに二つの文章を読ませた。個人で取り組み、その後、班内で自分の考えを発表させ、

	相違点	共通点
<ul style="list-style-type: none"> ・「しく寝ると」 ・「眠るがたります」 ・「眠るがたります」といふ 	<ul style="list-style-type: none"> ・「すべかり」 ・「うきせかいらもの」 ・「月の静けし」 	<ul style="list-style-type: none"> ・八月十五日の夜、かぐや姫が泣いている。 ・十五日の夜から眠るがたります。
<ul style="list-style-type: none"> ・「本座敷を」と ・「うきせかいらもの」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「茶屋はどのみから」 ・「さすはりな」 ・「代たのにおじい」 ・「がうきせかいらもの」 ・「かぐや姫」 	
<ul style="list-style-type: none"> ・「見つけた」といふ ・「三すはりな」 ・「代たのにおじい」 ・「がうきせかいらもの」 ・「かぐや姫」 		

かぐや姫の寝たかぐや姫
かぐや姫の寝たかぐや姫
かぐや姫の寝たかぐや姫

図10 比べ読みワークシート

班として紹介したい部分はどこかを話し合わせた。その際、面白さの根拠となる部分やその部分に対応する原文も一緒にまとめることができるワークシートを工夫した(図11)。

絵本では描かれていない部分に関心をもち、それを面白さとして捉えている班が多かった。また、登場人物の心情面では、現代と変わらないものに気付き、それを面白さとして捉えている班があった。

ウ 視点3：伝え合う活動のための工夫

「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、自分の考えを交流する力」(身に付けさせたい力⑬)を育てるために、比べ読みをして感じた「竹取物語」の面白さを、フリップボードを使って分かりやすく紹介するという場を設定した。フリップボードは2枚用意し、1枚目には面白さを簡潔に書き、2枚目にはその根拠となる部分や比べて分かったことを書くように指導した。比べ読みの場面で使用したワークシートを、発表の際の発表原稿として活用させた。また、面白さの根拠となった部分の原文を、班全員で二回音読して紹介させた(図12)。

最後に、発表会を通して、千年以上読み継がれている「竹取物語」の魅力について、200字程度でまとめさせた。これは、古典が時を超えて読み継がれている優れた作品であることに気付かせ、そこには今も昔も変わらない人間の姿や知恵が受け継がれていることを実感させることをねらいとしたものである。

(4) 検証授業Ⅰの成果と課題

ア 成果

(ア) 授業後のアンケートを見ると、古人の姿に共感したり現代を生きる自分たちの姿と照らし合わせたりすることが「楽しい」、「やや楽しい」と肯定的に答えた生徒は、授業前の57%から68%と増えている。自分たちの知っている「かぐやひめ」とその原典である「竹取物語」を比べ読みし、古人と自分たちを照らし合わせる学習をしたことで、古典学習への興味・関心を高めることができた(図13)。

(イ) 授業後の感想(表10)を見ると、「時は経っても人の心は変わらない」や「昔の人たちの思いも共に今に伝わっている」といった感想が見られ、作品が時を隔てて今へ受け継がれてきているものと実感していることが分かる。

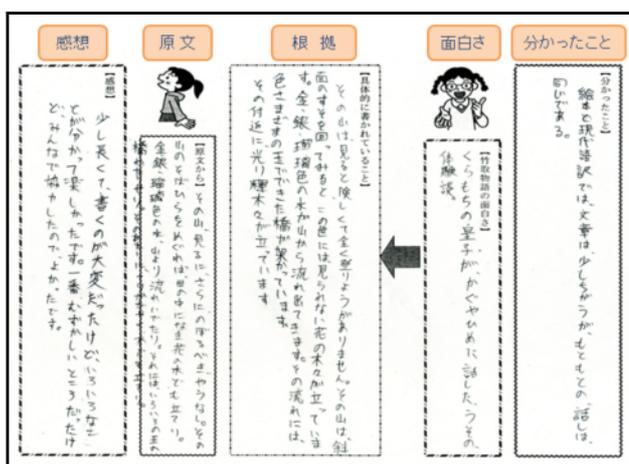


図11 まとめワークシート

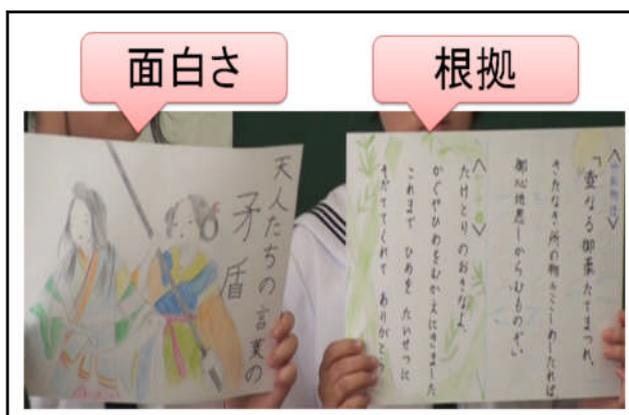


図12 発表のフリップボード

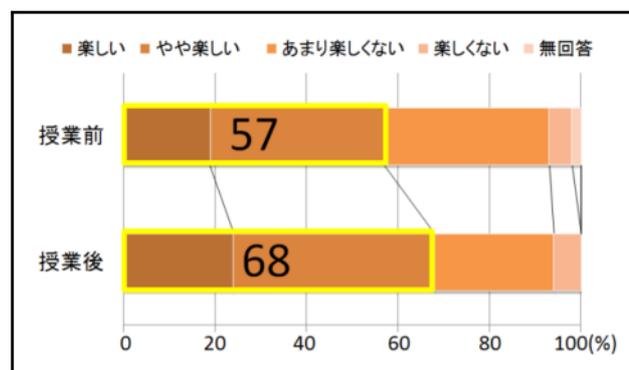


図13 「昔の人の考え方に共感することが楽しいか」についての意識調査

イ 課題

- (ア) 発表の場面では、「根拠を明確にして伝える」ための技能の充実を図る指導の工夫が必要である。
- (イ) 比べ読みの活動を取り入れることで、単元の総時数が増えた。増えた時数をどこで調整していくかについて、年間指導計画の見直しを視野に入れた検討が必要である。

表10 検証授業Ⅰの感想

- 古典は、時はたっても人の心は変わらないということを感じた。親の心はいつの時代も子を愛する、ということを知った。
- 竹取物語の面白かったところや今とちがうことについてよく分かったのでよかった。これからは古文を昔のことと思わずに読み比べていきたい。他の古文のおもしろいことや違いを見つけてたい。
- 絵本と違って、最後は感情をなくして、月の世界に帰るところが悲しかった。あと、昔の言葉が難しかったけど、読めるようになってよかった。竹取物語は、昔の人たちの思いも共に今へ伝わっているのだと感じた。

5 検証授業Ⅱの実施と考察

(1) 検証授業Ⅱの概要

検証授業Ⅱは、鎌倉時代末期に兼好法師によって書かれた随筆『徒然草』の学習である。生徒は1学期に随筆作品である『枕草子』で、作者の思いを想像しながら読む学習をしている。兼好法師は独自の価値観で世の中を鋭く見つめており、『徒然草』には、人生や自然に対する兼好法師の感想や意見、エピソードや教訓などが書かれている。そこには長い年月を経てもなお変わらない考え方や現代とは大きく変わってしまったものが描かれている。法師の目を通して書かれた当時の教えや失敗談などは、現代にも通じるものである。中学生がいくつもの章段に触れ、自分たちの体験と照らし合わせることで、古人の考え方は現代にも通じることを実感し、古典をより身近に感じ、味わうことのできる作品である。

視点1： フラッシュ型教材の活用と音読活動を取り入れる。

視点2： 「古人の考えは現代にも通じる」ということを実感させるために、同じ主題の『徒然草』の章段の比べ読みを行う。

視点3： 比べ読みをして分かったことや考えたことを、ポスターセッションという伝え合う活動により交流する。

ア 単元名及び実施期間

単元名：『徒然草』を比べて読み、考えたことを交流しよう

実施学年：出水市立出水中学校 2年3組 男子19人 女子17人 計36人

実施期間：平成24年11月1日～7日

イ 言語活動について

単元では、教科書教材の第五二段と第九二段をまず理解させた上で、「徒然草」の中からそれぞれの主題に共通点のあるほかの章段をそれぞれ三つずつ紹介した。その中から一つの章段を選び、教科書教材と比べ読みを行わせた。次に、比べ読みで分かったことと自分の体験を照らし合わせ、人生訓を考えさせる。伝え合う活動は、ポスターセッションの形態をとり、各班で選んだ章段のあらすじと教科書教材との共通点、自分たちの体験、人生訓を発表させ、意見の交流を行わせた(表11)。

表11 言語活動計画シート

第2学年 「徒然草」言語活動計画シート

1 単元について

単元名	徒然草を比べて読み、考えたことを交流しよう
-----	-----------------------

2 指導事項

伝統的な言語文化	読むこと
ア (ア) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。 (イ) 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。	エ 文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考え方をもちつこと。

3 身に付けさせたい力

<input type="checkbox"/> 現代語訳や語注などを手掛かりにして、作品に描かれた登場人物の言動から内容を理解する力 <input type="checkbox"/> 自分の体験と照らし合わせて、作品に表れた古人のものの見方や考え方を想像する力 <input type="checkbox"/> 交流会で自分の意見を伝えたり、ほかの発表を聞いたりして考えを深める力	身に付けさせたい力 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑬ ⑭
---	-------------------------------

4 単元目標

(1) 古典の文章に関心をもち、調べたことを交流しようとする。(関心・意欲・態度) (2) 徒然草を読んで作品に表れているものの見方や考え方に触れ、自分の体験と照らし合わせて自分の意見をもつことができる。(読むこと) (3) ポスターセッションを通して、お互い発表をしたり聞いたりして、自分の考えを深めることができる。(読むこと)

5 評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
(1) 徒然草について感想をもち、交流して考えを深めようとしている。	(1) 登場人物の言動の意味などを考えて内容を理解し、古人の思いを想像している。 (2) 交流会で、体験と照らし合わせた自分の意見を述べたり聞いたりして、考えを深めている。	(1) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しんでいる。

6 生徒の実態

<input type="checkbox"/> 古典に学ぶ意義を見いだせない生徒が多く、古典学習に対する意欲が低い。 <input type="checkbox"/> 歴史的仮名遣いの読みの定着が不十分である。

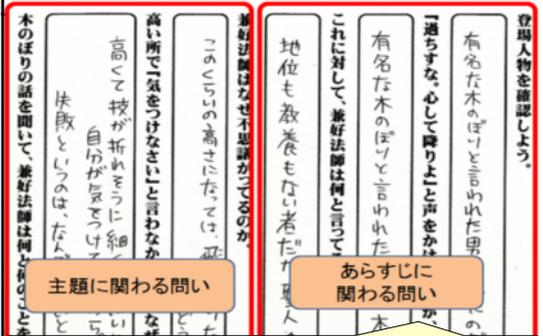
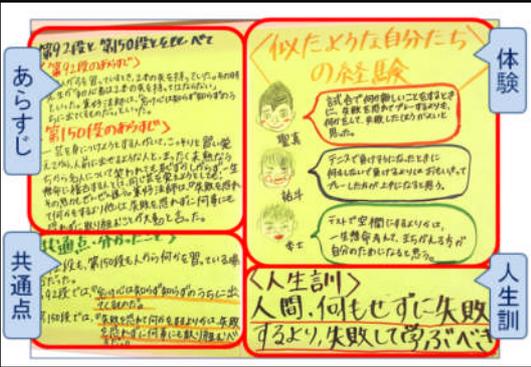
7 比べ読みと伝え合う活動を取り入れた言語活動

比べ読みについて	
【比べる教材】 「徒然草」第五二段・第九二段 「徒然草」のほかの章段	【目的】 <input type="checkbox"/> 教科書教材の読みを、深めさせる。 <input type="checkbox"/> 失敗や名人から学ぶべきことがあることに気付かせる。 <input type="checkbox"/> 自分たちの体験と照らし合わせ、古人のものの見方に共感させる。 <input type="checkbox"/> 自分たちの生活で生かせることを考えさせる。
伝え合う活動について	
<input type="checkbox"/> 伝え合う方法 ポスターセッション	
<input type="checkbox"/> 選んだ理由 ・ 自分たちが調べ考えたことを、分かりやすく伝えようと、効果的にポスターをまとめようとする。 ・ 少人数の前での発表になるので、発表者も自信をもって発表でき、また、聞き手も質問しやすくなる。 ・ ポスターセッションを5回行うため、より多くの生徒が発表することができる。	

(2) 検証授業Ⅱの指導計画（全7時間）

時間	主な学習活動	活動	主な手立て	評価規準
1	<p>登場人物の心情を想像しながら音読しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 単元目標と学習計画を知る。 ○ 徒然草について知る。 ○ 歴史的仮名遣いの読みの確認をする。 ○ すらすら読めるようにする。 	<p>文語の きまりの 理解</p> <p>音読</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ フラッシュ型教材で学習意欲を喚起する。 ・ 教科書以外の章段を比べ読みして、登場人物のものの見方を捉え、体験と照らし合わせて人生訓を考え、それをポスターセッションで発表することを伝える。 <p>身に付けさせたい力④</p> <p>身に付けさせたい力⑤</p>	<p>【国語への関心・意欲・態度】</p> <p>・観察、ノート</p> <p>【言語についての知識・理解・技能】</p> <p>・観察</p>
2	<p>第五二段を読み、登場人物の行動から兼好法師はどのような思いでいたかを考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 仁和寺の法師の行動とそれに対する兼好法師の考えを読み取り、仁和寺の法師はどうしたら失敗しなかったかを考える。 	読解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教科書で石清水八幡宮の位置を確認させる。 ・ 当時の仁和寺と石清水八幡宮の存在について説明する。 ・ 法師の勘違いに気付かせる。 ・ 絵を提示して、関心をもたせる。 <p>身に付けさせたい力⑦</p>	<p>【読むこと(1)】</p> <p>・ワークシート</p>
3	<p>第九二段を読み、「師」の言葉に対し兼好法師はどのような思いでいたかを考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ワークシートで内容を確認する。 ○ 「師」の言葉について、なぜこのようなことを言ったのかを考える。 ○ 「師」言葉に対し、兼好法師はどのような思いでいたかを考える。 	読解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 登場人物、状況、「師」の言葉、兼好法師の考えを確認させる。 ・ 「怠け心は知らず知らずのうちにでしてしまう」という主題については、中学生には共感しやすいので、自分たちの生活と結び付けて考えさせるようにする。 <p>身に付けさせたい力⑦</p>	<p>【読むこと(1)】</p> <p>・ワークシート</p>
4	<p>学びシートを手掛かりに、課題の章段を読もう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 各班で課題の章段（ア～カ）を読む。 <p>【A】 仁和寺にある法師（第五二段）</p> <p>ア 奥山に猫またというもの（第八九段）</p> <p>イ 丹波に出雲と言ふ所（第二三六段）</p> <p>ウ ある者、小野道風の（第八八段）</p> <p>【B】 ある人、弓射ることを習ふ</p> <p>エ 高名の木のぼり（第一〇九段）</p> <p>オ 能をつかんとする人（第一五〇段）</p> <p>カ ある者、子を法師に（第一八八段）</p>	読解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各班で課題を決める。 ・ 個人で考える時間を取った後、グループで考えさせる。 ・ 初めての文章に抵抗感を示す生徒には、現代語訳であらすじを理解するように助言する。 ・ ペア音読させる。 ・ 学びシートで、あらすじだけではなく、登場人物の行動や心情を想像できるようにさせる。 <p>身に付けさせたい力⑥</p>	<p>【読むこと(1)】</p> <p>・ワークシート</p> <p>・学びシート</p> <p>・比べ読みシート</p>
5	<p>二つの章段を比べ読みして、自分の経験と照らし合わせて、人生訓を考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 各班で、比べ読みをする。 ○ あらすじをまとめ、教科書教材と比べ読みして、共通点をあげ、同じような体験はないかを考える。 ○ 比べ読みして、自分なりの人生訓を考える。 	比べ読み	<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題①～③は「仁和寺にある法師」と比べ読みをさせる。 ・ 課題④～⑥は「ある人、弓射ることを習ふ」と比べ読みをさせる。 ・ 共通することは何かを考えさせる。また、そのことと似たような体験をしたことはないか、自分の体験を振り返らせる。 <p>身に付けさせたい力⑧</p>	<p>【読むこと(2)】</p> <p>・ワークシート</p> <p>・観察</p>
6	<p>分かりやすく伝わるように、工夫してポスターセッションの準備をしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ポスターセッションの手順を確認する。 ○ ポスターを分かりやすく作る。 	伝え合う活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ ポスターセッションとはどういうものかを再度確認させる。 ・ 今回のポスターセッションのねらいと手順、方法、ポスター例を示し、発表のイメージをもたせてから活動させる。 <p>身に付けさせたい力⑬</p> <p>身に付けさせたい力⑭</p>	<p>【国語への関心・意欲・態度】</p> <p>・観察</p>
7	<p>ポスターセッションで交流を行い、古人のものの見方・考え方を想像しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ポスターセッションを行う。 ○ 交流を通して考えたことをまとめる。 	伝え合う活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各班のリーダーには、事前に流れを説明しておく。 ・ 各班の発表内容と発表場所をリーダーから説明させる。 ・ 今回のポスターセッションは、班で動くので、移動の仕方を確認させてから始める。 <p>身に付けさせたい力⑬</p> <p>身に付けさせたい力⑭</p>	<p>【読むこと(2)】</p> <p>・観察</p> <p>・ワークシート</p>

(3) 検証授業Ⅱの実際

時		○学習活動	●教師の手立て等														
導入	1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元目標と学習計画を確認する。 ○ 徒然草について知る。 ○ 歴史的仮名遣いの読みを確認する。 ○ リズムを感じながら音読する。 	 <p>身に付けさせたい力④</p> <p>身に付けさせたい力⑤</p>														
	2・3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第五二段を読み、登場人物の行動や筆者の思いを読み取る。 ○ 第九二段を読み、登場人物の行動や筆者の思いを読み取る。 ● 絵を提示したり、当時の時代背景や状況を説明したりして関心をもたせる。 	身に付けさせたい力⑥														
	4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の手引「学びシート」を手掛かりに班ごとに比べ読みの章段を読む。 ● 比べ読みの教材については、文章量、内容、難易度に留意する。 	身に付けさせたい力⑦														
展開1	4	<p>【A】 仁和寺にある法師（第五二段） ア 奥山に猫また（第八九段） イ 丹波に出雲と言ふ所（第二三六段） ウ ある者、小野道風の（第八八段） 【B】 ある人、弓射ることを習ふ エ 高名の木のぼり（第一〇九段） オ 能をつかんとする人（第一五〇段） カ ある者、子を法師に（第一八八段）</p> <p>比べ読みの章段 【A】は、勘違いや思い込みにより失敗してしまうエピソードの書かれている章段。 【B】は、習い事や仕事をするときの心構えや戒めが書かれている章段。</p>	 <p>文章の内容理解を助けるために、話の概要に関わる質問と主題に関わる質問を入れた。</p>														
	5	<table border="1"> <thead> <tr> <th>人生訓</th> <th>体験</th> <th>共通点</th> <th>教え</th> <th>章段</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>最後まで油断しない!!!</td> <td>走っていて、一休かと思いで、ブーッってかきあげたら、最後にめがける二休</td> <td>自分が気づいていない間に、油断してしまうに比べて</td> <td>この一本で決着をつけてみようと思え。</td> <td>第五二段</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>失敗というなんでも</td> <td>第九二段</td> </tr> </tbody> </table> <p>登場人物を比較し、類似体験を想起させ、考えたことや人生訓をまとめさせた。</p>	人生訓	体験	共通点	教え	章段	最後まで油断しない!!!	走っていて、一休かと思いで、ブーッってかきあげたら、最後にめがける二休	自分が気づいていない間に、油断してしまうに比べて	この一本で決着をつけてみようと思え。	第五二段				失敗というなんでも	第九二段
人生訓	体験	共通点	教え	章段													
最後まで油断しない!!!	走っていて、一休かと思いで、ブーッってかきあげたら、最後にめがける二休	自分が気づいていない間に、油断してしまうに比べて	この一本で決着をつけてみようと思え。	第五二段													
			失敗というなんでも	第九二段													
展開2	6・7	<ul style="list-style-type: none"> ○ 分かりやすく伝わるよう工夫してポスターを作成する。 ○ ポスターセッションを行い古人のものの見方・考え方を想像する。 	<p>身に付けさせたい力⑧</p> <p>身に付けさせたい力⑩</p> <p>身に付けさせたい力⑭</p>														
	終末	 <ul style="list-style-type: none"> ● 発表者と聞き手の距離が近く、交流しやすいポスターセッションを取り入れる。 ● 事前に資料集を読ませ、質問を考えさせたり、予想される質問に対する回答を考えさせたりして、交流が深まるようにする。 ● 全てのグループの発表を聞くことができるように、ポスターセッションを6分ずつ5回行い、移動は班ごとに行わせる。 ● 発表者も全員が発表できるようにする。 ● 今回の授業を通して、学習したことや感じたことなど、自由記述で書かせる。 															

(4) 検証授業Ⅱの視点の工夫

ア 視点1：基礎的・基本的な知識・技能定着のための工夫

(ア) 「文語のきまりを理解する」(身に付けさせたい力④) ための工夫

本学級の生徒は1年生で学習した歴史的仮名遣いの読みの定着が図られていなかったことが、事前の確認テストの結果から分かっている。基礎的・基本的な知識・技能の定着のためには、毎時間、短時間で繰り返し練習する必要があると考えた。そこで、1年生と同じ手立てを取り、歴史的仮名遣いの読みを定着させることにした。フラッシュ型教材を用いて1年次の復習から始めた。基本的な古語から始め、授業で出てきた新しい古語を次々と増やしていった。毎時間、授業の始めに3分間練習を繰り返し行うことで、単元終了時に定着が図られた(図14)。このことから、2年生になってからでもこの指導は効果があることが分かった。

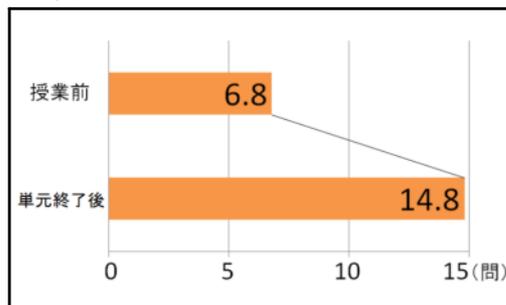


図14 歴史的仮名遣い読みの確認テストの結果

(イ) 「古典のリズムを味わう」(身に付けさせたい力⑤) ための工夫

フラッシュ型教材を使った歴史的仮名遣いの読みの練習の後には、音読活動を取り入れた。一斉読みやペア読み等、音読の形態も変化をもたせた。歴史的仮名遣いの読みが分かることで、音読もリズムカルにできるようになった(図15)。



図15 ペア読みの様子

(ウ) 「内容を理解する」(身に付けさせたい力⑥) ための工夫

教科書教材の内容を理解させるために、一問一答を中心にしたワークシートを準備した(図16)。また、挿絵や当時の地図といった資料を提示することで、生徒の興味・関心を高める工夫を行った。

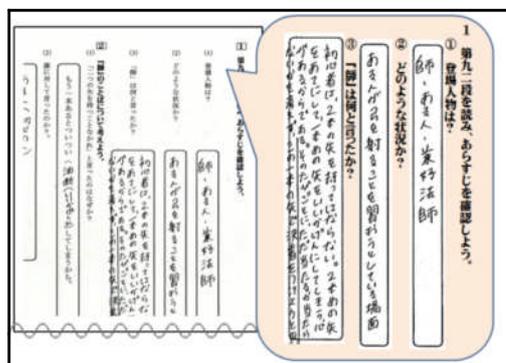


図16 ワークシート

イ 視点2：比べ読みのための工夫

(ア) 「想像しながら読む」(身に付けさせたい力⑦) ための工夫

まず、比べ読みに使用する教材選定に気を付けた。比べ読みに使用する教材については、文章量、内容、難易度が中学生にふさわしいかどうか留意して選び、教科書教材に関連する章段を用いることにした。まず、第五二段「仁和寺にある法師」は勘違いに気付かずにいた法師の失敗談である。この章段と比べ読みする教材は、同じように勘違いや思い込みにより失敗してしまうエピソードが書かれている章段を三段選んだ。また、第九二段「ある人、弓射ることを習ふ」では、人間というものは、どのような状況でも、無意識のうちに油断する心が出てくるので、常に全力でことに臨むようにという考えが表れている。この章段と比べ読みする教材は、習い事を上達させるためにどうしたらいいかという章段を三段選んだ。これら六つの章段は、資料集としてまとめ、最初の授業で配布した。生徒たちは、班ごとに六つの章段から一つを選び、同じテーマの教科書教材と比べ読みを行った。

これにより、一度学習した教科書教材の読みを、更に深めることにつながった。表12は、比べ読みを行った教材について観点ごとにまとめたものであり、生徒が個又は班で比べ読みを進めていく際に、教師の補助資料として活用したものである。

表12 比べ読み教材を観点ごとにまとめたもの

【A】勘違いや思い込みによる失敗をテーマとした章段				
	仁和寺にある法師 (第五二段)	ア ある者、小野道風の (第八八段)	イ 猫また (第八九段)	ウ 丹波に出雲という所 (第二三六段)
登場人物	仁和寺の法師 かたへの人	ある者・ある人	連歌しける法師	聖海上人
あらすじ	年を取るまで石清水八幡宮に参拝していなかったので思い立って行ってきたが、麓の高良神社や極楽寺をこれだけのものかと誤って参拝し、本来の目的を果たせなかった。	小野道風が書いたとされる「和漢朗詠集」を持っている人に、その時代的誤りを指摘したが、かえってこれを大事にした。	猫またが出るという噂におびえていた法師が、ある夜、連歌会の帰り道で、猫またに襲われ川に落ちた。しかし、それは自分の飼い犬であった。	丹波の出雲神社で、獅子と狛犬が背中合わせになっているのを見て、何か深いいわれがあるだろうと推測して、涙を流して感動したが、実は子どものいたずらであった。
失敗の原因	誰にも尋ねることなく、一人で歩いて行ったから。	珍しいものと信じて疑わず、人の指摘も受け入れなかった。	噂を聞き、夜道を歩くときは気を付けようと思いついていなかったから。	人に尋ねることなしに、思い込んでしまった。
共通点		思い込みが強すぎる。	思い込みが強すぎて、勘違いに気付かなかった。	人に確かめることなく、思い込みで行動している。
【B】習い事等をテーマとした章段				
	弓射ることを習ふ (第九二段)	エ 高名の木のぼり (第一〇九段)	オ 芸能上達の要点 (第一五〇段)	カ 励むべき一つの大事 (第一八八段)
登場人物	ある人・師	高名の木のぼり 人・兼好法師	一芸を身に付けようとする人	ある者・子
あらすじ	初心者が弓を射るのに二本の矢を持っているところ、先生は「二本持つてはいけない。一本で決めようと思え」と言った。人は知らず知らずのうちに油断する心が出てくるものがある。この師の教えは全てに通じる。	木のぼり名人が、木を切らせた男が軒くらいまで降りてきたときに「注意しておりなさい」と言葉を掛けた。それは、高い所は自分で注意するが、事故は簡単などころで起こるからだという。身分の低い者の言葉であるが、聖人の教えにかなっている。	芸を身に付けようとする人が、未熟なうちは人に知られないようにし、熟達してから人前に出ようとするのは、成功しない。未熟でも名人の中に出て、人から悪く言われても笑われても構わずに修行を続ければ、上達する。	ある者が、子に法師になって、説教をして生活していく手段にせよ、といったところ、その子は説教師になるために、導師として招かれたときに、馬から落ちてしまったのは情けないと思い乗馬を習った。また、法事の後で、酒などをすすめられたときに、法師が芸無しなのは、興ざめするだろうと思ったので、早歌を練習した。そのうちに説教を習うべき暇がなくて、年をとってしまった。
教え	人は知らず知らずのうちに油断する心が出てくるので、いつも全力で臨むように。	失敗は簡単などころで起こるものだ。大丈夫と思ったところで油断するな。	何かを習い身に付けようとするときは、人の目も気にせず一生懸命励むことが大切。	目標を持ったなら、あれこれ手を出さずことなく、一つのことに精一杯頑張ることが大事。
共通点		何かことをするときは無意識に油断しないようにする。	何かを学ぶときは全力で頑張る。	何かを学ぶときは、一つのことに全力をつokus。

生徒がスムーズに比べ読みを行うために、比べ読みの資料の表記について留意した。次の三点のように表記を全て教科書に準ずる形で提示した（図17）。

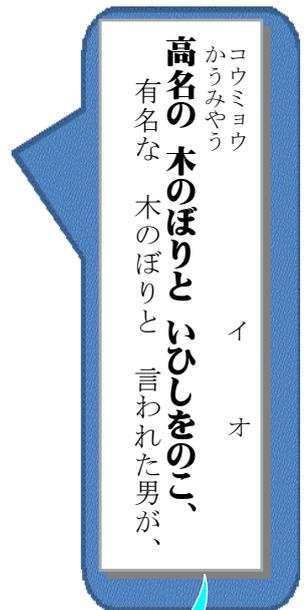


図17 比べ読み資料と表記について

- ・ 原文の右一行目には、漢字の読みを平仮名で書く。
- ・ 原文の右二行目には、歴史的仮名遣いの読みを片仮名で書く。
- ・ 原文の左には、現代語訳を書く。

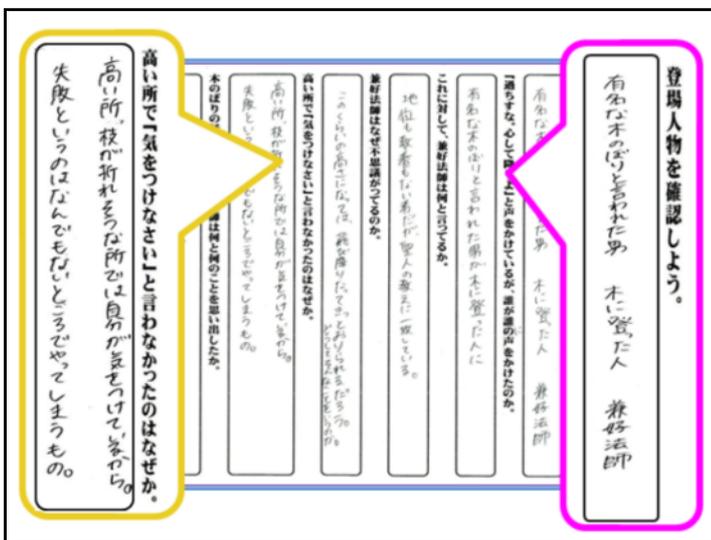


図18 学習の手引「学びシート」

さらに、課題の章段の内容を読み取れるように、学習の手引「学びシート」を作成した（図18）。このワークシートには、文章のあらすじが分かるように、話の概要に関わる質問や、主題に関わってくる質問を入れた。個人で考えた後、班で話し合わせた。自分たちで読み取る班がほとんどであったが、課題によっては、読み取りが難しいものもあった。教師は、机間指導を行い、質問を受けたり迷いのある生徒への助言を行ったりした。

(イ) 「比べて読む」(身に付けさせたい力⑧) ための工夫

次のシート（図19）は、教科書教材と各班で選んだ章段を比べ読みし、手順にあるような観点に沿ってまとめさせたものである。班内で、項目ごとに活発な意見交換が見られた。特に共通するテーマに関する自分の体験や、テーマから導き出される人生訓を考える際には、古人の考えが現代にも通じるものがあるということを強く感じているようだった。

人生訓	体験	共通点	教え	章段	○あらすじ ○比べ読み ○比べ読み
最後まで油断しない!!! 	走っていて、一往かと思つて 「ひんまも」でかきあげたら 最後までみかるとはなれた	自分が気づいていない間に、 油断してしまつたのであります	この一本で決着を つけようと思つた。 失敗というわけ、 なんでもないとはい やめておきましょう	第二章 第五章	有名な水の怪「高木水」の怪を抜く切られた 高木水は何も言わずに任せておき、「注意してと 危ないところではなとつけているが、安心して油断し、 失敗してしまつた

図19 比べ読みワークシート

- [手順]
- 1 学習の手引を使って、読み取った課題のあらすじをまとめる。
 - 2 主教材（第五二段・九二段）と比べ読みをする。
 - ・ 教え
 - ・ 共通点
 - 3 同じような体験をしたことはないか、自分たちの体験を考えさせる。
 - 4 以上のことから考えられること、人生訓をまとめる。

ウ 視点3：伝え合うための工夫

(ア) 「交流する・伝える」(身に付けさせたい力⑬⑭) ための工夫

本校の生徒は、話し合う活動や伝え合う活動の経験が少ない。そこで、次のような特徴のあるポスターセッションを伝え合うための活動として取り入れることにした。

ポスターセッション	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表者と聞き手の距離が近く、交流しやすい。 ○ 多くの章段に触れることができる。 ○ 発表者はあまり緊張せずに発表できる。 ○ より多くの生徒に発表の機会ができる。 ○ 質問者は、疑問に思ったことや意見を述べやすい。
-----------	--

生徒たちはポスターセッションの経験がほとんどない。そこで、ポスターセッションの目的や方法、また、どのようなときに行われるのか、発表者や参加者の態度はどうあるべきかなど、ポスターセッションの説明から行った(図20)。その上で、ポスターの作成に取り掛からせた。比べ読みで分かったことを、ポスターにまとめるために、次のような項立てでポスターにまとめさせた(図21)。

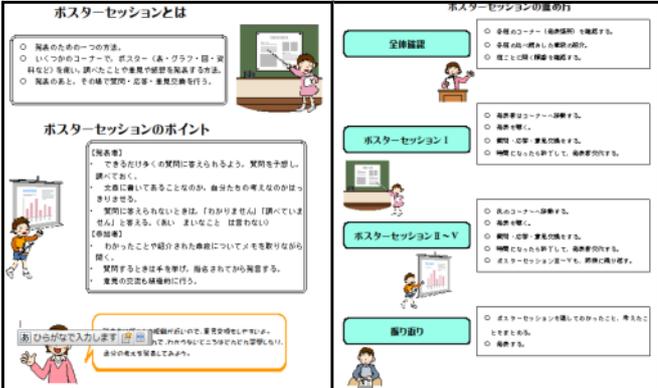


図20 ポスターセッションについての説明

- 1 分かりやすくまとめた各章段のあらすじ
- 2 比べ読みで分かったことや、共通点
- 3 同じような体験
- 4 考えたこと・人生訓

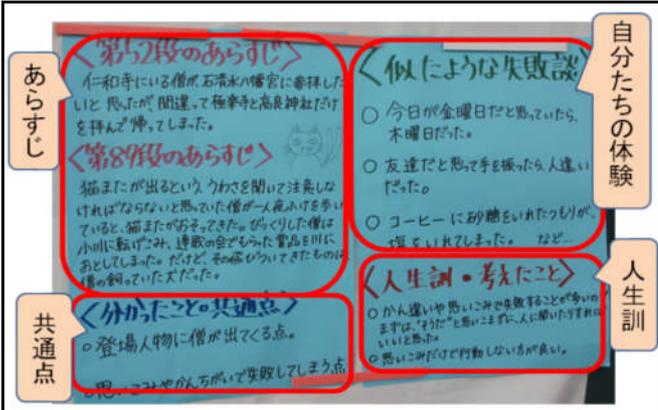


図21 実際のポスター

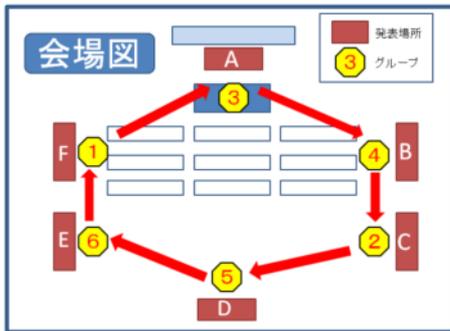


図22 会場図



図23 交流の様子

会場については、普通教室では狭いため理科室を借りて行った。ポスターセッション時の移動がスムーズに行えるように、会場図（図22）を用いて事前に説明しておいた。

今回は、全てのグループの発表を聞くことができるように、ポスターセッションを6分間ずつ5回行い、移動はグループごとに行うことにした。発表者についても全員が発表できるようにした。

また、いつでも資料を手にとって読むことで、古典に触れられるようにするために、資料集は単元が始まると同時に全員に配布した。自分たちが調べていない章段についても事前に読むことができ、分からないことや疑問に思ったことについては、質問ができるようにさせた。同時に、発表者側も自分たちの章段を詳しく説明して紹介することに留意させた。予想される質問を考えさせ、それについて、答えられるように準備させた（図23）。

さらに、ポスターセッションのあと、授業後の感想をまとめさせた。今回の授業を通して、学習したことや感じたことなど、自由記述で書かせた。

エ 授業後の感想とアンケートから

(ア) 授業後の感想

授業後の感想を整理し、表13のようにまとめた。感想を検証の視点ごとに整理したものである。自由記述であったが、比べ読みを通して、古人の考え方に触れ、古人のものの見方や考え方が現代にも通じることに気づき、古典の面白さを感じていたことが分かる。

また、自分たちと比べながら、先人の知恵をこれからの生活に生かしていきたいと考えていることも分かる。表14は生徒の感想の一部である。初めての活動であるポスターセッションについての感想も見られた。

表13 検証授業Ⅱの後の感想(1)

生徒の授業後の感想	人数
歴史的仮名遣いについて触れている	6
○ 歴史的仮名遣いは難しい。	1
○ 毎時間練習したので読めるようになった。	5
比べ読みについて触れている	21
○ 自分たちの体験と比べることができた。	6
○ これからの生活に生かしていきたい	3
○ 古典が面白いと思うようになった。	3
○ 昔の人の考え方が分かった。	6
○ 古典がよく分かるようになった。	3
ポスターセッションについて触れている	21
○ 発表を聞いて、これからの生活に役立てたい。	2
○ ほかの章段の話もよく分かった。	3
○ 昔の人と同じ考えや違う考えが分かった。	3
○ 古典の面白さが分かった。	4
○ 自分の発表がよくできた。	3
○ 人前で説明したり質問に答えたりするのが難しかった。	4
○ 発表の準備には工夫が必要である。	2
その他	9
○ ほかの古典作品を読んでみたい。	5
○ 古典が好きになった。	4

表14 検証授業Ⅱの後の感想(2)

<p>【視点1に関する内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 古典は読んでも意味が分かんなかったけど、一つずつ言葉を読んでいくとおもしろい話だった。最初の時は読めなかった言葉とかも、毎回授業のはじめに読んでいたので読めるようになりました。図書館などで古典の本を見つけたら、読んでみたいと思います。 ○ 古典は難しい言葉で書いてあってあまり好きではありませんでした。でも、あらすじがわかると、おもしろい話で、はずかしい失敗談がたくさんあり、好きになりました。出来事は昔のことで共感できるところは少なかったけれど、その失敗は自分の失敗と似ていて共感できました。もっといろいろな話を読んでみたいと思いました。 <p>【視点2に関する内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「猫また」と「仁和寺にある法師」を比べ読みして、共通点は思い込みやかんちがいで失敗してしまうところだった。こういうことは、私たちの体験でもたくさんあったので、今度からそういう失敗をしないように気をつけていきたいと思った。他の班の話でも似たような話がたくさんあったのでおもしろいと思った。 ○ 今回の古典の授業を受けて、古典への関心が深まり、古典のすばらしさを改めて実感しました。そして、古典というものは、その作者が生きていた年代や、その風景、その時代の人たちの思っていたこと、心がうつしだされるということでした。 <p>【視点3に関する内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ポスターセッションで質問したときに、発表者の人がはきはき答えてくれたので、すごくわかりやすかったです。昔の人の考え方を想像したのが、楽しかったです。古典が好きになりました。
--

(イ) 授業後のアンケート

右のグラフは「古典の授業が好きだ」ということについて、授業前と授業後のアンケートを比較したものである(図24)。

肯定的な回答をした生徒は、授業前の32%から71%に増えている。比べ読みやポスターセッションを取り入れたことで、これまでの抵抗感が薄れたのではないかと考える。

同じように「古典の授業が分かる」について、肯定的な回答をした生徒は授業前の34%から90%に増えている(図25)。これは、比べ読みをするために学習の手引「学びシート」を参考にしながら、自分たちで、本文を読み進めたり、古人と現代に生きる自分たちの考え方と比べたりすることが、大きな自信につながったのではないかと考えられる。

次に、「古典の授業で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つ」についての肯定的な回答は、授業前の26%から、単元終了後は59%に増えている(図26)。

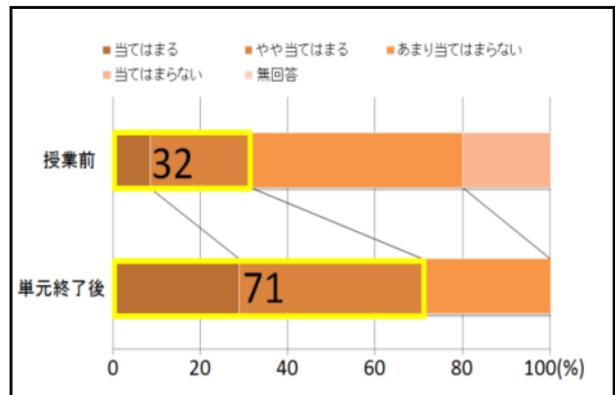


図24 「古典の授業は好きか」についての意識調査

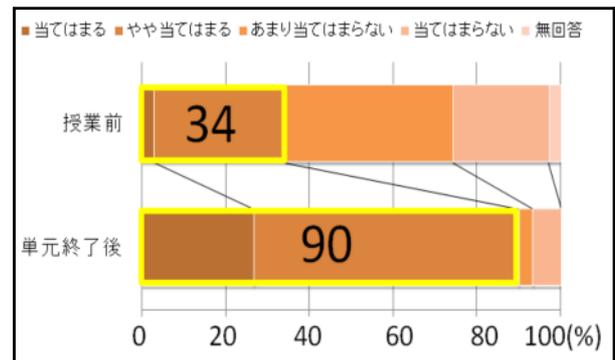


図25 「古典の授業は分かる」についての意識調査

比べ読みをして、自分の体験と比べることにより、古人も今と変わらない失敗をしていると感じたり、古典の中の教えが現代を生きる自分たちにも当てはまる、と感じたりすることができたからであろう。しかし、一方では否定的な回答をした生徒が、依然40%以上を占めている。今回のねらいが、古典が現代にも通じることに気付かせることであったことを考えると、この結果は、更に研究を深める必要があるということを示している。

古典の授業において関心のある学習内容についての問い（図27）についてはどの内容も授業後は関心が高くなっていることが分かる。特に、「音読したり暗唱したりしたい」や「他の古典作品も読んでみたい」と回答した生徒が大きく増えている。毎時間歴史的仮名遣いの読みの練習や音読を取り入れたことが、古典に対する抵抗感を少しでも軽減できたのではないかと考えられる。今後もこのような取組は続けていきたいと思った。

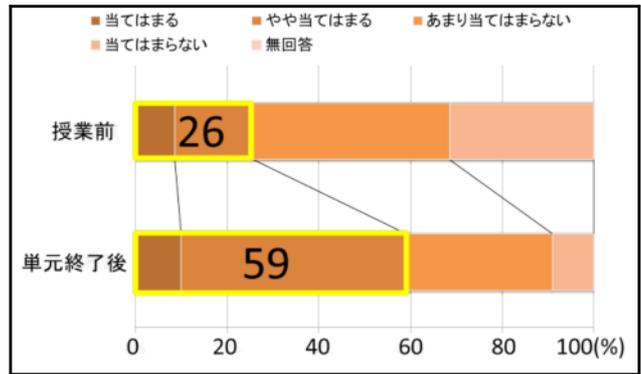


図26 「古典の授業で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つ」についての意識調査

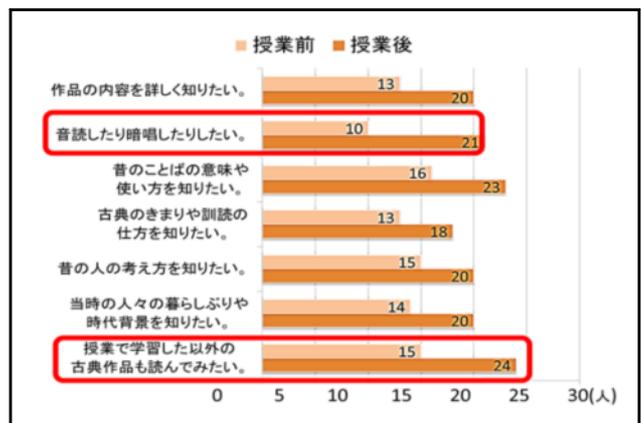


図27 「古典の授業において関心のある学習内容」についての意識調査

(5) 検証授業Ⅱの成果と課題

ア 成果

- (ア) 視点1では、フラッシュ型教材を活用し繰り返し練習したことで、歴史的仮名遣いの読みの定着が図られ、滑らかな音読活動へつなぐことができた。
- (イ) 視点2では、学びシートや現代語訳を参考に自分たちで古典を読み進めたことで、「古典の授業は分かる」と肯定的に回答している生徒が増えた。また、自分の体験と比べ人生訓を考えさせたことで、古人の考えは現代にも通じるものがあるということを多くの生徒に実感させることができた。
- (ウ) 視点3では、ポスターセッションで自分たちの考えを発表したり、他の班の考えを聞いたりすることで、関心・意欲が高まり「他の古典も読んでみたい」と思う生徒を増やすことができた。
- (エ) 三つの視点を位置付けたことで、「古典の授業が好きだ」という生徒が増えた。

イ 課題

- (ア) 学習の手引「学びシート」を基に、個人で取り組む時間をもっと確保して、一人一人の読む力を高めていけるような手立てを工夫していきたい。
- (イ) 交流の場面では、簡単な質疑応答は見られたが、伝え合う活動を様々に工夫することで、自分のものの見方をより広げられるような指導の工夫を行いたい。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 身に付けさせたい力を整理して、教材も含めて系統表にまとめ、それに基づく手立てを講じて授業を行ったことで、生徒が古人と自分を照らし合わせるような主体的な読みができるようになり、古典に自ら向き合おうという態度や興味・関心を高めることができた。
- (2) 比べ読みの活動や伝え合う活動を行うことで、古人の考え方に触れたり、古人と自分の姿と比べたりして、古典は時間を超えて今に受け継がれてきたものであることを実感させることができた。
- (3) 基礎的・基本的な知識・技能を定着させたことで、内容理解に深まりがみられた。特に、登場人物の心情や作者の思いを想像しながら読む力に高まりがみられた。

2 研究の課題

- (1) 比べ読みの活動や伝え合う活動を取り入れることで単元の時数が増えてしまうが、他の領域と関連させながら指導事項を焦点化した年間指導計画を作成することで改善していきたい。
- (2) 伝え合う活動を年間を通して位置付けるとともに、自分が理解したことや感じたことなどをより深く活発に交流できるように、言語能力の育成に努めていきたい。

【引用文献】

- | | | | |
|--------|--------------------------|-------|------|
| ○文部科学省 | 『高等学校学習指導要領解説 国語編』 | 平成22年 | 教育出版 |
| ○大村 はま | 『大村はま国語教室3 古典に親しませる学習指導』 | 1983年 | 筑摩書店 |
| ○岩崎 淳 | 『岩崎淳国語論集Ⅱ 古典に親しむ』 | 2010年 | 明治図書 |

【参考文献】

- | | | | |
|------------------------|---|-------|----------|
| ○文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説 国語編』 | 平成20年 | 東洋館出版社 |
| ○角川書店編 | 『ビギナーズ・クラシックス日本の古典 竹取物語』 | 平成13年 | 角川ソフィア文庫 |
| ○角川書店編 | 『ビギナーズ・クラシックス日本の古典 徒然草』 | 平成14年 | 角川ソフィア文庫 |
| ○いもとようこ | 『かぐやひめ』 | 2008年 | 金の星社 |
| ○小出光著 | 『文法全解 徒然草』 | 1996年 | 旺文社 |
| ○森田信義・山元隆治・山元悦子・千々岩弘一著 | 『新訂国語科教育の基礎』 | 2010年 | 溪水社 |
| ○文部科学省 | 『言語活動の充実に関する指導事例集
～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～』 | 平成24年 | |
| ○国立教育政策研究所 | 『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のため
の参考資料 中学校国語』 | 平成23年 | |
| ○田中洋一編著 | 『新しい教材と視点で創る古典の授業
伝統的な言語文化の享受と継承』 | 2010年 | 東洋館出版社 |
| ○船津啓治 | 『比べ読みの可能性とその方法』 | 2010年 | 溪水社 |
| ○川上弘宜 | 『「比べ読み・重ね読み」で「一人読み」』 | 2009年 | 明治図書 |
| ○村田伸宏「群馬・国語教育を語る会」著 | 『国語の力「伝統的な言語文化と国語の
特質に関する事項」の言語活動』 | 2011年 | 三省堂 |
| ○長崎伸仁・山口国語授業研究会著 | 『論理力をはぐくむ国語の授業』 | 2008年 | 三省堂 |
| ○柴田義松・阿部昇・鶴田清司編著 | 『あたらしい国語科指導法』 | 2010年 | 学文社 |

【研究の概要】

本研究は、古典に親しむ態度を育てるために、伝統的な言語文化における身に付けさせたい力を整理して、古典を主体的に読むための国語科学習指導の在り方について研究したものである。

具体的には、抵抗感を軽減させるように基礎的・基本的な定着を図るための手立てを毎時間取り入れ、比べ読みの活動のための教材選定やワークシート等の工夫と伝え合う活動のために発表の工夫を行い、それらを位置付けた授業を通して検証を行った。

その結果、生徒は古人の姿と自分たちの姿を照らし合わせ、古人の考え方は現代にも通じていることを実感し、古典への関心を高めると同時に理解を深めることができた。

【担当所員の所見】

本研究は、「比べ読みの活動と伝え合う活動」を中核として、古典を主体的に読むための国語科学習指導の在り方を追究したものである。

本研究の特色は、生徒の実態や指導の反省等に基づき、古典を読むための基礎的・基本的な知識・技能の定着を図りながら、古人の姿に共感させたり、現代を生きる自分たちの姿と照らし合わせたりしながら、古典を主体的に読むための指導の手立てを工夫したことである。

具体的には、「伝統的な言語文化に関する事項」の指導について、身に付けさせたい力を系統的に整理したこと、古典への抵抗感を軽減するためのICTを活用したフラッシュ型教材の開発、様々な音読活動の工夫、複数の資料を比較して読む「比べ読みの活動」における教材の開発や学びシートの工夫、発表・交流を意識した「伝え合う活動」における発表形態の工夫など言語活動を充実させる多くの手立てが、生徒の思考の基盤を広げ主体的に学ぶ態度を養う上で効果を挙げている。

学習指導要領において、「我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ継承・発展させる態度を育てる」ことが求められている。今後、本研究の成果を生かし、古典に親しもうとする生徒の育成を目指した指導を一層充実させることを期待したい。